

# 第5章

## 参加者の声

## 第5章 参加者の声

### 浅野泰史

日米学生会議は私にとって非常に貴重な経験であった。それは文化や背景、考え方、言語の異なる学生とともに1ヶ月という期間共に過ごし、相互に理解をシェアということが全く初めてであり、戸惑いながらも分科会やフォーラム、見学などを通して親交を深めるということは非常に刺激的であった。ほとんどが素晴らしい記憶として決して忘れることのできないものであり、学生のうちにこのような経験ができたことは私の視野を広めることにつながった。

### 安藤歩美

現代世界を、何と形容すればいいだろう。

冷戦直後のフランシス・フクヤマの答えは「退屈」であった。すなわち、世界でイデオロギー対立が終焉したことで、これからは平和で、「退屈」な時代がやってくる。ところが我々が今目にしているのは、「混沌」たる世界ではないか。退屈どころか、内戦、テロ、破綻国家を抱えるようになった国際社会は、大変動の最中にある。

そんな混沌とした世界をより住みやすい場所になりたい、という漠然とした夢を胸中で描くものの、田舎育ちの凡人。それを言葉に出すほど実現への自信はなかった。私がこの日米学生会議に参加した理由も、社会を主体的に変えていく人間になるだけの、自信と覚悟をつけるためだったように思う。JASCへの参加は私の中で、日本を、世界を動かすエリートたちの仲間に入るための挑戦であった。

しかし会議では、自信をつけるどころか寧ろ限界を感じるの方が多かったように思う。だがそれは必ずしもネガティブなものではなく、自分という人間を見つめるいい機会になった。72人もの、文化も思想も考え方も違う個性豊かな人間が集まるJASCという社会。その中で自分はどのような弱みを持っていて、逆にどの点で強みを持っているのか。自分はどのような人間で、人間関係の中でどのような役割を果たすべきであるのか。いろいろな人と関わり、ホテルの中、バスの中、散歩中、居酒屋などで毎日突発的に始まる議論を重ねるうちに、自然と

自分が逆照射され、自分の考えや人格を見つめなおすことができた。

アメデリが加わってからは、「日本人」としての自分の特性をより意識するようになった。この会議で再発見したのは、日本人の思考の深さは世界一なのではないかということだが、国際舞台において活躍するというとき、こうした日本人の特性や豊かな独自の文化思想的背景を強みとして渡り合っていく人間になりたいと、会議を通じて強く感じた。グローバルな人間になるということは欧米的な価値観を持ち合わせた人間になるということではなく、おそらく世界中のローカルな文化の美徳は国際社会においても活かすことができるのではないだろうか。背後に独特の文化や考え方があるからこそ人はおもしろく、世界に多様性が生まれる。アメデリと太平洋戦争のことや現在の日米関係についてなど核心となるような議論をした際、本当に語るべき考えがある際には向こうも私の拙い英語を真剣に聞こうとしてくれた。こうした経験は、将来「日本人」として他国の人々と付き合っていきたいという私の思いを強くさせた。

日常から、世界へ。世界は様々な人の様々な働きによって成り立っている。東京のお偉いさんたち、函館のイカ漁師さん、小布施町の農家の人々、京都の能役者さん…それぞれがそれぞれの能力を活かして社会を支えている。私には、この世界で何ができるであろう。その答えはこの1ヵ月足らずの会議では見つけられなかったが、きっと私にも、私の限られた能力で私にしかできない働きがあるはずである。この会議で得られた宝物、大切な仲間と思い出をたくさん胸に抱えて、この「混沌」とした現代世界を、歩き出そうと思う。

### 飯沼瑤子

息を潜めてアメデリの到着を待った暗闇、全く覚えられなかった最初の自己紹介、回を重ねるごとにみんなの新たな一面に触れた分科会やスペシャルピック、71人の内輪ネタとなったイカ学、日本の良さを再認識させてくれた町、タクシーでコインランドリーを探した夜、日米の教育について語り合った

はなまるうどん、朝の5時に鳴り出す誰かのアラームの音、JASCmailを書きながら迎えた朝。

本会議が終わって、もうしばらく経つのに、ふとした瞬間ひょっこりと、いとも簡単にJASCの思い出がスライドショーのように再生されて止まらなくなることがある。

JASCとは自分にとって何だったのか。この答えは今もまだはっきりと出せそうにない。だが、JASCに参加して私が出たものなら、数え切れない程挙げる事が出来る。一番大きなものはやはり、これから先もずっと61回のJASCerというつながりで結ばれた仲間だろう。

JASCerとして私たちがつながったと強く思えた、忘れられない日がある。それは8月6日、函館で迎えた8時15分だ。もしかしたら、お互い一度もこの出来事について語り合うことなく終わったかもしれない原爆を投下した側の国と投下された側の国の私たちは、同じ時間に同じ場所で同じ画面を前にして、共に黙祷を捧げた。私たち72人が、教科書で学んだことはそれぞれ違うかもしれない、これまで育ってきた環境の中で培った考えもみんな異なるものだろう。しかし、1分間の黙祷を終え、視線を交わしあった時、私たちは日本とアメリカという異なる国の人という関係から、思いや経験を共有しあえるJASCerとしての関係に変わることが出来たように思えた。

JASCで得たものは、楽しい思い出ばかりではなかった。それは、この一ヵ月では何度も自分の知識不足を痛感させられることとなったからである。様々に広い興味や視野を持つJASCerから新しいことを学べば学ぶほど、自分が何も知らないことに気づき傷つくことも多かった。だが、それに気づけば気づくほとに、また学ぼうというモチベーションを保ち続けることができたのは、その悩みを共有し、支えてくれたのもまたJASCerだったからである。

この学生最後の夏に出会ったかけがえのない仲間。当たり前のように一緒に過ごした、本当は何よりも当たり前でない一ヵ月間。あの一ヵ月を恋しく思う瞬間は確かにあるけれど、不思議と寂しくは思わない。それは、それぞれにとってJASCが持つ意

味は違っても、72人の人生の中に組み込まれた一ヵ月間はこれからも変わらず、これから先の未来を作り上げていく土台となって私たちをつないでいてくれると信じられるからだ。

“そのときの出逢いが 人生を根底から 変えることがある よき出逢いを”

—相田みつを

### 衣袋聡

私達の仲間の一人が会議前から計画していた暗闇の歓迎から始まった第61回日米学生会議本会議も、今の私達にとっては「思い出」になった。私にとっての日米学生会議はどんなものになったのか。私はこの機会から何を心得、そしてこの機会に何を与えることができたのか。皆がそれぞれ別々の答えを持っているだろう。そして1934年にこの会議に参加した先輩方も、同じように何かを得て、何かを与えて世界に散らばって行った。そして彼らが築き上げてくれた世界に私達は生かされてきた。会議の終わりを目前にして、私はようやく自分が大きな歴史の一部になったことに気がついた。

会議が始まる前、日米学生会議は人生を変える経験になると語った先輩がいたのを覚えている。1ヵ月に渡るBRICS、開発、健康、公と私、環境、教育、食糧についてのディスカッションと、著名な専門家たちによる講演を通じて私はどうなったのか？

安全保障や地域活性化や新興経済についての問題意識や知見は日米学生会議に参加したことで飛躍的に高まったと感じている。日米学生会議が始まる前までの私の内部の変化の過程を簡潔に記すとすれば、留学1年間を含む大学生活3年間の勉強で考えたことが、就職活動という社会との出会いを通じて社会の現実を考えるツールへと応用されつつあるところであったように思う。日米学生会議という環境で、私は安全保障や地域活性化といった、まさに日本の国家デザインについてあるべき姿を模索した。4年生として参加した私にとっては、学生としての生活の総まとめとして、自分の信じる理想に対して専門家の批判を仰ぎ、アイデアに一層の幅と深みを持た

## 第5章 参加者の声

せるべく会議の刺激的な友人と語らうことができたことは、非常に意義深い。

また、日米学生会議が持つこのような知的側面の意義を超えた部分への言及も不可欠だろう。日米学生会議に参加する以前の私と現在の私の間での最も大きな違いは、71人の友達ができただことだ。私達にとって、日本・アメリカは「国・国」として存在していた。共に過ごした時間を通じて私達にとっての日本・アメリカは「人・人」としての存在に変わったように思える。

更に言えば、「人・人」の関係として結びついたその友達は、単なる友達ではなく、「自分自身のために」という殻を超えて社会の問題について本気で議論することができる友達であり、一つの目標に向かって邁進できるかけがえのない仲間だ。

国から人への関係の変化、そしてその人・人の関係を通じてなされる「社会・社会」のデザインこそ、まさに1934年に大先輩達が思いをはせた、よりよい世界を構築したいという願いそのものではなかったか。私はこの想いのバトンを私達61回の仲間はずかりと受け取ることができたと思う。これからは私達がこのバトンをつないでいく役割を担う。それは私達の日々の仲間に対する想いと、社会に対する想い、によってのみ脈々と生かされ続けるのだと私は思う。

小説家の作品は、時間の経過とともに処女作に向かっていくという。皆どこかで人生を振り返り、今私が生きているような二十歳前後の青春へと心が向かっていくのかもしれない。そうした意味で、この夏に築くことができた友情は、真に一生の財産になるのだろう。

2009年の夏は、私にとって学生としての最後の夏だった。一度しかない人生の中で22歳の夏はもちろん一度しかないが、私はこの夏をここにいる仲間と過ごせたことをとても幸せに思うし、誇りに思う。ここにいる全ての人、一緒に過ごした全ての瞬間に感謝し、その気持ちをこの先ずっと忘れない。

梅本勇基

私は昨年(2008年)8月に広島で開催されたサマー

スクールに参加したことで、60th JASCの参加者と知り合いになり、このことがJASCの存在を知り興味を持ったきっかけでした。その後、JASC Presents in Hiroshimaに参加し、また第60回日米学生会議日本側参加者報告書を読む過程で、自らもJASCに参加したいと思うようになりました。

私は正直なところ、選考書類を提出した時点では自らが61st JASCの一員になれるとは思っていませんでした。しかし、今までは失敗を恐れ挑戦しなかったことで後悔をしたことが数多くあり、「今回はまず挑戦をしてみよう!」と思い、活発な議論の場・有意義な時間が与えられるJASCを想像しながら、必要な書類を提出しました。実際に61st JASCに参加できることが決まったときの喜び・期待を今でも覚えています。不安なこともありましたが、今回は挑戦せずに後悔はしたくないとの思いで、参加を決意しました。

私がJASCに参加した目的は大きく分けて3つありました。第一の目的は、様々な背景を持ち様々な分野を専攻している学生と、幅広い話題について意見交換・議論をすることでした。それは、常に幅広いテーマに対して興味・関心を持ち、かつそれらに対する考え方が隔たらないようにするためには、他者との意見交換・議論が必要不可欠であると考えているからです。実際にJASCに参加してみると、多くの参加者は各人が大学で専攻する分野以外に関しても興味・関心を持っており、新たな知識を得ること、議論をすることを楽しんでいました。私はこれらを通じて、自らの専攻する医学以外の分野に関しても様々な知識・視点を得ることができました。また幅広い教養を身に付けることの必要性・面白さを再認識することができました。

第二の目的は、医療以外を専門とする人が、医療の分野に関してどのような興味・関心や考え・要望を持っているのかを知ることでした。それは、将来医療系の職に就く私にとって、これを専門としない人の立場を知ることが、患者さんの気持ちをより理解した上で医療を行うために重要なことであると考えます。どのような分野においてもそうですが、自らの専門分野における常識が必ず

しもそれ以外の分野の人にとっても常識であるとは限りません。また、知識や考えには個人差があります。このような至極当然のことを理解しておくことは、如何なる分野を専門とする人にとっても非常に重要なことであると考えます。私は第一希望の分科会「現代社会と健康」に所属することで、実際に医療系以外を専攻する参加者と活発な議論を行うことができ、大変貴重な機会となりました(分科会において話し合った内容に関しては、分科会活動の報告の項を参照して下さい)。

第三の目的は、医療系以外の人にも現在の医療制度や「健康」とは何かについて、より興味・関心を持ってもらうことでした。医療系以外の人々が医療に関して興味・関心を持つことは、医療が医療従事者の自己満足に終わらず、個々の患者さんに適した良質な医療を提供していくために重要であると考えます。現在は過去と比較すれば、患者さんが自身に対する医療について医師に一任するのではなく、疑問点や希望する医療を医療従事者側に述べられるようになってきており、これは大変良い傾向だと思います。この傾向を推進すべく、私との関わりの中で一人でも多くの参加者が自身の健康や現在の医療制度等に興味・関心を持ってくれたなら、大変嬉しく思います。

JASC本会議の一ヵ月で、私がどれほど成長することができたのかは分かりません。しかし、大切な仲間と出会うことができ、今後の人生においてとても大きな意味を持つであろう、とすることはできます。このような大変貴重な機会が与えられたことに感謝をしています。

末筆ではございますが、多くの方々より本会議の準備過程においてご指導を賜りましたこと、また本会議の開催においてご尽力を頂いたことに、心より御礼を申し上げます。

#### 大谷 翔

これまでに私は米国へは高校留学で約10ヵ月間滞在したことがあり、その時にすでに米国に魅了された。また、それなりに米国という国を理解していたつもりでいた。そして、日本開催である第61回日

米学生会議では、今度は自分がホスト国代表として彼らを魅了させてやる番だという意気込みを持って会議に臨んだ。そんな会議中、常々気になっていたことがある。彼らは日本に来て何を発見、そしてどう考えるのだろうか。日本の国際的なプレゼンスが下がり、中国などの他国が台頭していくことが懸念されるもしくはすでに進行中という情勢のなか、果たして米国は日本に何を求めるのだろうか。本当の日本の良さとは何なのか。日本開催であった今年の会議はそんな問いに対する答えを探していく意味合いを含んでいたように思う。

東京、函館、長野、京都は米国人学生達と回ること、私達日本人にとっても新鮮な体験をする場となった。東京では、分科会で靖国神社へ行き、日本の辿った歴史について深く考える機会を得た。歴史から見る日本的な考え方、日本がとった行動の妥当性、甘かったお互いの歴史認識を素直に話し合い、相手視点から物事を見つめることで真実の違った側面が見えてきた。函館の透き通った空気の中では、現地海産物を一緒に笑いながら味わい、フォーラムでは日本の防衛について米国との関わりを真剣に議論した。長野では小さな観光都市、小布施町で受けた笑顔に溢れ、美味しい料理を振舞う歓迎に感動した。京都では観光名所を回り、ファイナルフォーラムに向けての準備にメンバー全員で共に悪戦苦闘した。

気がつけば、日を追うごとに日本と米国の距離感が縮まっていった。それは米国参加者の発言から感じられた。長野で行った全員リフレクションの際、Dylanが英語の壁があるのは仕方ない、米国側参加者達はもっと日本側参加者の話を聞く姿勢を見せようと提案してくれた。また同じ分科会で最初はシャイだったDavidが戸惑いながらも会議を良くしたい気持ちをみんなの前でシェアしてくれた。米国側参加者達の日本を理解しようとする歩み寄りには確実なものだった。私はこの会議を通して彼らが日本の良さを知ってくれたと自信を持って言える。共に長く深く過ごしたことでお互いのコアな部分まで知ることができた。日米学生会議を通して得られた一番の収穫は？と聞かれれば、それは間違いなく同じ時間

## 第5章 参加者の声

と空間を濃密に共有した仲間達である。

また、本会議の中で私は常に自問自答していた。この日米学生会議への参加、経験が私の将来にどう生きてくるのだろうか？私自身と社会はどのように関わっていくのだろうか？事前活動の一環として、OBの方々にインタビューをする機会があり、本当に魅力的な人格者ばかりで憧れを抱いた。しかし、彼らの多くは商社マンで、自分の将来と重ね合わせることが困難だった。そして参加者メンバーの大半は文系であり、工学部所属でエンジニアを目指す自分とは根本的に社会貢献の仕方が違う。幸せを作るエンジニアへの模索が続いていた。会議中、バス移動の際に一人の米国側参加者と将来について話したときに、“That’s interesting! Sho, you yourself can be a new model. :)”とあっさり答えてくれた。ないものは作る、選択肢を自分で新たに加えるというcreativeな発想が私には欠けていたのだ。

会議後、友人から「日米学生会議どうだった？翔は結局、将来何がしたいのさ？」と聞かれた。その答えに私は思わず、日本で『産業革命』を起こすと大口を叩いていた。私の中での産業革命とは技術革新から社会革新を起こし、世界を率先するモデルとなっていくことである。こんなことを平気で言うようになったのも日米学生会議を通して何か作り上げることに對しての可能性を大きく感じたからだと思う。

### 大西すなほ

時間というのは、不思議なもので時間そのものは均一な成り立ちのものであるわけですが、それはいったん消費されるといびつなものに変わってしまいます。ある時間はひどく重くて長く、ある時間は軽くて短い。おそらく、私にとってハイライトされる一瞬が、ほかの人にとっては記憶にも残らないものも多々あると思います。

あの場所に身を置いていますと、自分が日米学生会議から何を得るのか、逆に一体自分のような人間が日米学生会議に、そして他のJASCersにギブできるものがあるのか、構築した人間関係が明日へと続くものなのか、特殊な環境下だからこそ成立しえた

ものではないのかという漠然とした不安につきまといられるのも事実です。

しかし、過ごしている時は気づきませんでした。日にちを追って振り返っていると、そのような重くて長い一瞬が確実に多くなっていたことに気付かれます。同時に得たものも数えきれない。自分の力不足に頭を垂れることもありましたが、その経験も限りなく学んだことに近い。重要なことは、「じゃあ、その経験をどうするのか」と次のステップに繋げることだと思います。

10年後、20年後に私達が連絡を取り合っているかどうか、私にはわかりません。進路も価値観も環境も変わっていくでしょう。ただ、私は、あそこで、私にとって大切な瞬間があったことを、何気ない言葉をかけてもらったこととか、一緒に歩いた道や、くだらない出来事に笑いあったことを、そんな数ある時間を私が記憶しているという、それでいいのだと思っています。そして、私達が消費した時間を、今度は自分で再生産していく作業、つまりハイライトされる一瞬から、自分が何を考えられるのかを探究する作業をどのように遂行していくか、そういう意味において、私の日米学生会議はまだ終わっていません。

そして、この報告書をご覧になっている方々の中には次の日米学生会議に参加するか迷っている方もいらっしゃると思います。ただ言えるのは、私もそうだった、ということです。受かるなんて全く思っていなかった。正直、未だにわかっていません。

それでも最後に、このような機会を与え、運営してくれたECの皆、特に私の健康分科会の皆に心から御礼を申し上げます。私にとってRT活動が一番の実りあるものだったことも、エミをはじめとした皆のおかげです。

本当に行ってよかった。家にいて夏休みをただ過ごしているよりも、みんなと話ができて、色々な物を食べて、色々な場所に行って、実に恵まれていたと思います。本当にありがとうございました。

### 大宮 透

日米学生会議に参加する前の私は、さしてアメリ

カに興味や知識があった訳でもなく、アメリカに対して抱いていた印象も決して良いものではなかった。それでも、会議に応募しようと決心した理由は、信頼できる会議以前からの仲間が、第60回会議を通して大きな成長を遂げる姿を見ていたこと、また特に教育の分野において、様々なバックグラウンドをもつ人々と意見交換をし、そこから自分ができる何かを見つけないか、というこの2つの思いがあったからだ。

会議は約3ヵ月の事前準備と約1ヵ月の本会議をもって、先日、一応の終わりを迎えた。事前準備の中では、特に同じ地球市民教育分科会に所属していたメンバーと、フィールドトリップやメール、スカイプ等での議論を通して、強い絆を深めることができたし、分科会以外でも、5月の春合宿、7月のサハリン訪問などを通して、日本側メンバーとの個人的な繋がりを築くことができたと思う。私にとって、年齢や学年、さらには各自が持っている知識や専門を超えて、フラットな関係のなかで過ごす日米学生会議での日々は、非常に刺激のかつ新鮮なものだった。時には就職活動や今後の人生について一晩中語り明かし、時には日本や世界の未来について、真剣に語り合える仲間を得られたことは、私にとってこの上ない喜びである。会議の性質上、どうしても“日米”での交流が話題の中心になるが、約4ヵ月間の会議のなかで得られた日本側メンバーとの友情や信頼関係は、私にとっては、この会議が与えてくれたかけがえのない財産の一つとなっている。

アメリカ側メンバーとともに過ごした本会議では、事前準備の段階ではあまり見えてこなかった自分自身の様々な問題が浮かび上がってきた。特に英語力や絶対的な知識量の不足を感じることは毎日の日課のようなものだったし、アメリカ側メンバーとの会話や議論の中では、これらの問題から派生する“自信の無さ”が、露骨に現れてしまっていたように思う。しかし、その一方で、「何よりも重要なことは、相手を理解しようとする心とそれを具現化した積極的な行動である」という、最も根本的で、かつ大切なことを改めて確信することもできた。相手に対して常に積極的に働きかけていく姿勢が、全く

違うバックグラウンドや考え方をを持った両者の相互理解のために、何よりも必要になってくると思う。日本語でも英語でも、この姿勢を貫くことが本当の意味での信頼関係を築かせてくれるということ、身をもって実感することができた本会議だった。

はじめの方に述べたように、この会議に参加するまでの私は、日米という関係をそれほど重要視したことはなかったし、今までの自分自身の経験や知識、人間関係が、どれほどこの会議の中で活かせるのか、また、この会議で得たことがこの後の自分の人生にどのように関わってくるのか、全く予想することもできなかった。しかし、不思議なことにこの会議を通して出会った多くの人々や、訪れた多くの場所が、実は私の今までとこれからを繋ぐ不思議な関係性や縁を持ち合わせているという確信を得ることが多々あった。全てはどこかで繋がっていて、自分でもわからない方向に私を導いてくれているような気がしてならない。私とこの会議を繋げてくれた友人が居て、この会議の中で出会い、私の考え方を大きく変えてくれた人々や場所があった。そして今、62回の実行委員に立候補し、もう1年日米学生会議のなかで様々なものを吸収し、成長したいと願う自分が居る。この不思議な縁が、今後どのように繋がっていくのか、今の段階では全く読めないでいるが、少なくとも今ここで言えることは、日米という関係がこれからの自分の人生で重要な位置を占めていくだろうという確信である。第61回日米学生会議から生まれた国境を越えた友情や参加者それぞれの人生が、この先どのように繋がっていくのか、楽しみで仕方ない自分が居る。

#### 緒崎祐香

日本、そしてアメリカの各地から学生が集まり一ヵ月間議論することの意義は一体何なのか。この問いを考えずに、参加する本当の意義は見出せないと会議中感じていた。JASCが発足した1934年は太平洋戦争直前でアメリカの対日感情が悪化する中、学生が日米間そして世界の平和を考えるという理念があった。対して現在はグローバル化が進む社会、懸念される国際問題はあっても日米は当時のような

## 第5章 参加者の声

緊張関係にはない。それならば、何故この会議が毎年開催されていてOBOGを含む沢山の方が支援して下さるのか。実行委員は何故、一年間JASCの準備に全てをかけて精一杯取り組めるのか。最後の数日間まで答えが見つからずにいたが、人と話をする中で自分としての何かを導き出せたのではないかと思う。JASCに参加することで、71人の仲間を得ることができた。集団行動が苦手な自分の思う儘に行動したがる人間だと自覚している私が一ヵ月楽しく過ごすことが出来たのは、素晴らしい仲間にも恵まれたお陰だろう。住んでいる場所、通っている大学、専攻の学問分野、生きてきた背景が違う人たちと一緒に東京、函館、長野、京都と移動して交流することは勿論楽しい。雑談からでもお互いに得るものは確実にある。しかし、単に楽しい以上の価値を求めることが可能な場がこの日米学生会議である。参加の動機、求める意味や目標は各個人ごとに異なっており、統一した見解を掲げようとすることは多様性の否定だ。参加者がこれから先それぞれの分野で活躍する中で考える事項の切欠となること、表層的な知識ばかりでなく知恵を身に付けること、新しいものに触れて興味を広げること。RTだけでなくフォーラムやSpecial topic、自由時間の中で各自の目標を追求する環境を提供できること。これがJASCの素晴らしいところの一つだと思う。私個人としては自分が今まで漠然と抱いていた疑問について、沢山の人の意見を取り入れることができたことがとても嬉しかった。特に大きな意味を持ったのは、長野サイトでの新生病院の内坂先生との出会いだった。RTでの議論が停滞していた時に新しい方向性を導く切欠を下さただけではなく、私が今まで考え続けてきた問題についても実際に医療の現場で長年向き合ってきた人としての意見を頂けた。これから先、大学の卒業論文だけでなく自分の生き方や考え方に対して大きな影響になるだろうと現時点でも確信している。また、上手に役割分担しながら長い時間議論し続け、ファイナルフォーラムで一緒に発表できたRT memberの皆に感謝したい。最後に、充実した会議にする為に参加者それぞれが物事の本質を考えようとする事は不可欠なのではないだろうか。例

えば「国際交流、理解、多様性、主体性をもって行動すること」。単にこれらの言葉を口にする事、誰かが言っていることを聞いて解った振りをすることも容易い。しかし、本当にこれが何を示すのか。自分との関わりが何なのか。自ら答えを得ようとする限り、只の楽しかったひと夏の経験というだけで終わってしまう。JASCは、会議中だけで完結するものではない。

### 小野 元

自由——学生が繰り広げる議論の強みとして、すなわち日米学生会議のよさとして、僕がいろいろな方々に説明してきたことだ。外部の利害を配慮する必要もなければ、話し合った内容によって社会的制裁を受けることもない。

だが、ことばを発するとき、自由であることを徹底するのは難しい。例えば所属する会社のルールだとか、宗教の戒律だとか(決して宗教を軽んじているわけではないが)、自分以外のなものにも拘束されないことは、それらを自分の判断基準として代用できないということだからだ。僕の場合、ときどき「実行委員だから」と、肩書きを自分の思考を避けるための言い訳にしまい、後悔している。

外部から自由であることは、自分自身から自由でないこと、自分はこの20年の経験からは逃れられないことを浮き彫りにする。学生会議を何か特別な場のようにとらえ、自分から切り離れたことばを口にしても、意味がないのだ。例えば、僕が農業についてどれほど理想主義的なことを語ろうとしても、農業を体験していないことからくる後ろめたさが伴うが、この後ろめたさを拭い去ってしまえばもはや僕のことばではなくなってしまう。自分から逃げなければ、それぞれのことばには、自分の中で、何にどのような意味を付与しているのか、すなわち何に価値をおくのかにじんでいる。

一般的には、価値が相対的であることが広く認識されて以降、価値について語る無意味さや価値そのものの価値の崩落が指摘される。人それぞれの部分は立ち入らず省略し、議論できる部分に焦点をあてるほうが合理的なのだろう。しかし日米学生会議で

は、分科会やリフレクションなどの機会、何を重要視するか、確固たる考えが定まっていなくても語り出そうとする人が多く、またそれを正面から聞き取ろうとする人も多い。僕はこの雰囲気から惹かれ、この会議を通して、ことばを交わしながら、できるだけ他者の価値観に近づきたいと目標を立てていた。

さて、目標が達成できたかどうかと振り返ってみると、個人的には反省点が並ぶ。まず、体力不足や実行委員としての仕事の準備不足から、参加者と話す時間が少なく、さらに相手がなぜこう言うのかと考えることが少なかった。例えば分科会セッションが終わる度に、日本側、アメリカ側ひとりひとりから意見をきこうと試みたりもしたが、伝達や応答のマナーも未熟だった。議論の組み立てに試行錯誤で、より多くの参加者の意見を引き出せず、焦りから強引に自分の意見を押し通そうとすることもあった。「solutionという語でなくsuggestionを使うべきだ」という意見のように、かすかな所に価値観は顔をのぞかせていたのに……。同様に、他者を鏡にして、自分がなぜこう思うのかを突き詰め、表現することからしばしば逃げ出した。

もちろん反省ばかりではない。会議を通して参加者ひとりひとりが葛藤を乗り越え、それがことばや姿勢にあらわれるのを見て、うれしく感じ刺激を受けた。価値観はことばだけに表れるのではない、という当たり前のことも教えられた。数え切れないほどの無言の行動が、ことばより重みをもつことを見せ付けられ、そのような行動に励まされ、救われてきた。そして、行動が見えなくても、日本やアメリカにいる彼らの存在そのものに、一年を通して支えられてきた。

この会議での様々な経験が自分の価値観の一部を形成していくのだろう。しかし、それは絶対的なものでない。自分にとって大事なことが固定されて、省みられなくなってしまうたら、それは何かのルールのように自分以外の外部になってしまうからだ。状況に応じて何が重要なのかを自分の内部で問い続けなければ、自由であることにはならない。それはちょうど、75年の長きにわたり毎年のように、日米

学生会議がその存在意義を問い続けてきたことと似ている。

#### 加藤 梓

日米学生会議に参加して学んだことは、限られた時間を精一杯過ごす大切さである。

事前活動、本会議でのRT、フィールドトリップ、ファイナルフォーラムに向けての準備、OBOGの方々との話し合いの機会など、無限には存在しないそれぞれの時間の中で私はたくさん大切なことを学べる機会に恵まれた。

日米学生会議の本会議中は日々、参加者に刺激される毎日だった。初めは、参加者の中で日本人の参加者、アメリカ人の参加者といった「壁」があったが、その壁は徐々になくなっていき、日米学生会議が終わるころには完全に、学問面で、そして何よりも人としてリスペクトする一個人になっていた。心から尊敬する学生に囲まれ、そしてかつてない程の多くの新たな機会に恵まれたことで、私にとっては本会議中、毎日成長するきっかけがあった。

日米学生会議を通して学んだことはthe importance of making the most out of it である。2009年の夏に私は一生忘れないことを学んだ。

#### 坂田奈津希

「参加者の声」を今日までに提出しなければならぬ。しばらく何を書こうか考えているのだが、なかなか筆が進まない。友達から会議の感想を聞かれても「楽しかったよ」の一言で終わってしまう。これほど充実した1ヵ月間は人生で初めてであったのに、やはり感想という感想が出てこない。本会議が終わり十日間経とうとしている今、ようやくその理由が分かった気がする。それは、自分の中で「日米学生会議」がまだ消化されていないから。だから、はっきりとした感想が出てこないのではないだろうか。

たしかに本会議は終わった。分科会活動やフォーラムを通じてたくさんの知識を得た。新たな仲間とも出会い、数えきれない刺激を受けた。しかし、これらはすべて最初の「きっかけ」にすぎない。仲間との関係はまだ続くし、学ばなければならないこと

## 第5章 参加者の声

はまだたくさんある。私にとって日米学生会議とは「きっかけ」、スタートラインに立っただけと言えなくもない。しかし、その「きっかけ」こそ、私がずっと待ち望んでいたものであり、大きな意味を持っているのだ。

私は帰国生である。それをとても幸運なことだと思っただけで、帰国生でなければ自分には価値がないのではという不安が常にあった。日米学生会議だって帰国生じゃなければ受かっていない。分科会での話し合いも英語が喋れなかったら何も貢献できない。私は「帰国生」であるからこそ価値があって、「帰国生」じゃない私には何も残らないのではないかと。日本に帰国して以来、そして会議が始まったときもずっとそう考えていた。

しかし、日米学生会議は、私が長らく抱えていたこの不安を取り払ってくれた。それまでは一人で生きていくことを「自立」と信じ込んでいた。しかし、頼り頼られ、刺激を与え与えられる中で人は成長していく。チームプレイにおいて、一人一人自分の役割をきちんと果たすことが重要である、といった小さい頃に教わったようなことがここに来てやっと共感するようになった。みんなが自分を頼ってくれるのが嬉しくて、自分もみんなのために頑張る。私には私の役割がある。今自分ができることを精一杯やろう。そう考えているうちに、自分が「帰国生」とあるというコンプレックスが抜けていった。常に自分に対し否定的だった自分と打って変わって、自分に価値がないのならこれから自分を磨いていけばいいと前向きにものごとを考えるようになったのだ。

また、これまでは人に何か頼む、相談するといった行為は甘えのように思えて好きではなかった。自分のことは自分にしか分からないから、一人で考えて行動するべきだと常に自分に言い聞かせていた。しかし、学年も出身も経歴もバラバラのみんなと一か月過ごしたことで、閉鎖的だった私の世界はぐんぐん広がり、いかに視野が狭かったかにショックさえ受けた。もっと人に相談していればよかった。もっと人の意見に聞く耳を持てばよかった。その反省も踏まえ、これからはいろんな人と会って、いろんな話をして、たくさん刺激し合って、自分を高めてい

こう、と決心している。

私はまだスタート地点に立っただけ。いかに自分を変えていけるかはこれからの自分次第。でも、今私は未来の自分に大きな希望を持っている。最後に、そう思えるようになった「きっかけ」を作ってくれたみんなに心からお礼を言いたい。みんな、本当にありがとう！これからどうかよろしくね!!

### 笹岡祐衣

日米学生会議が終わり1週間が過ぎたが、1ヶ月の間に余りも多くのある事を経験し、考えたためか、まだ頭の中で整理がついていない。しかし、この会議が私に与えてくれたものはたくさんある、ということは確信できる。

1回生の冬にこの会議について知った。参加する決心をし、1次試験の書類を送った時はすでに締め切り1週間前を過ぎていた。長い間迷った理由は自信がなかったからである。海外経験は中学生の時に10日間アメリカに行っただけ、高校は理系、大学で学んでいることは専門性がない、という状況だった。歴史あるこの会議には経験・知識・語学力がそろった人が参加するものだと思っていたし、実際過去の参加者の大部分がそうであった。それでも参加を決めたのは長い夏休みに何かに真剣に打ち込みたかったからである。面接試験を経て合格が決まった時は嬉しいと思う反面、不安な気持ちが大きかった。

5月に初めてメンバーと顔を合わせ、本番までの約3ヶ月はペーパーを書くのに必死だった。講演会に参加したり、教授へ質問に行ったり、話を聞きたい人にアポイントメントをとったりと、あつという間だった。中途半端にはならないよう全力で取り組むことを目標に会議に臨んだ。気合いは十分だったものの、始めの1週間は英語を話すことが怖く、アメドリと積極的に交わろうとしなかった。それでも一緒に東京観光に行ったりするうちに少しずつだが緊張は解けたし、話さないよりは話した方が良く、という開き直りの精神に至ってからは少し楽になった。サイトが移るにつれアメドリとの距離は縮まってきたが、違う悩みも生まれた。それは自分の伝えたいことを英語で100%伝えられない苛立ちである。

日常会話はともかく、分科会では専門的な用語が飛び交い、英語を聞き取ることはできても意見や質問を英語で作ることができなかつたからだ。英語でだめなら日本語を使ってでも意見を言うべきだというのは頭でわかってはいても、なかなかできなかつた。これは今でも後悔している点である。自己嫌悪になって落ち込むことも何回かあったが、その度に慰めてくれる人がいたのはとても心強かつた。

今の時点で日米学生会議が自分の今後の人生に大きな影響を与えたかどうかはわからないが、この1ヵ月を通してそれまで自分が見ていた世界は本当に小さいものだったと感じたし、今までいかに消極的だったかを思い知らされた。ここで得たことを忘れず、これからも頑張っていこうと思う。

#### 神馬光滋

日米学生会議とは

日米学生会議—それは私の人生を変革し、潤いを与えてくれた大事な場所であると同時に、私の存在の起源でもあるのだと言うから、笑ってしまう。笑

大学2年生の春よりこのコミュニティに参画して以来、本当に多くの方々との出会いを通して触発され、これらが私の可能性を拡大するきっかけとなった。今でこそ「主体性」や「起業家精神」という価値観に魅力を感じ、それらを軸に生きようとしているが、これらがなかったら、どれほど今とは違う人間だったろうと思う。1934年、根強い問題意識から日米学生会議を構想し、創設した先輩方、またそれらを継続させ、多くの人々が飛躍する場として保ち続けてきた先輩方に今改めて、深く感謝の念を申し上げたい。また、第60回会議、第61回会議でお世話になった皆様方にも、心の底から感謝の念が込みあがってくると同時に、十分に感謝をしきれてこなかった自分が残念でたまらない。これを言語化できた今、手遅れではないことを祈って、感謝のメールや手紙を送り始めようと思う。

日米学生会議の活動を通して私は成長し、表面的なスキルを超越する、より本質的な事柄を多く学んだ。それは例えば、物事の意義を追求することであったり、多様性を受容し、価値観の強要はしないこと

であったりと、私の人生と人間性に深みを与えてくれるものであつたと思う。第61回会議の実行委員活動も至高な体験となり、私を語る上で、根源的な記憶として生き続けることは疑いの余地がない。しかしながら、ただ一点、悔やまれる点がある。ドラッカーは、「組織はすべて、人と社会をより良いものにするために存在する。すなわちミッションがある。目的があり、存在理由がある」と言う言葉を残した。まさに、真理をついた格言であると思う。ところが、実行委員であつた1年間、私には365日も考える時間があつたにも関わらず、最後まで、第61回日米学生会議のミッションを自分の中で言語化することができず、もちろんそれでは仲間と共有をすることもできなかった。誰かに会議の目的を聞かれれば、「長期間の共同生活を通じた人間的成長」や「グローバルな視野の獲得」など、もっともらしい言葉を使って表現することはできたが、それだけでは未だに違和感が残る。第60回会議が終わった時には、「尊敬し合える最高の仲間たちができた」という感触が鮮明に残っており、それ自体会議の本質であるとは思いますが、それが日米学生会議の一義的ミッションであるかは、まだわからない。恐らくこの戸惑いの根底には、私が敬愛する、ミッションを組織の第一義とする社会的企業やビジョナリー・カンパニーの存在があり、日米学生会議にも、エスタブリッシュメントとして存在するのではなく、リーダーシップを発揮するような社会的な大義を土台として活動することを求めているのかもしれない。

この問いに対する明確な答えが出ないまま、現役としての活動は幕を閉じてしまったが、無責任にも、後輩たちにこの問いを投げかけ続けようと思う。そして、彼らの中で共有された価値観を以て、未来を創造して欲しい。もちろん、私の中での追求が終わることもないだろう。

それでは、感謝をこめて。

#### 杉本友里

本会議の1ヶ月間は、本当にあつという間に過ぎってしまった。思い返せば東京から函館、長野、そして京都に至るまでにいろんなところに行って、いろ

## 第5章 参加者の声

んな人と話して、いろんなことをしたのだが、それでもあまりに早く過ぎてしまって、私は未だに自分が何が残ったのか思い返す日々が続いている。何も学ばなかったわけでも、何も感じなかったわけでもない。ただ、ことばにするには難しい体験ばかりだった気がする。

その中から、ことばにできた3点をまとめた。これらは、事前活動からの数か月の間に、私がJASCを通じて、正確には、ここにいる人たちと向かい合ったことで学んだこと、意識するようになったことだ。

### 『伝える意思と、自分のことば』

ひとの話を聞いてちゃんと理解するのは難しい。ひとに話をしてちゃんと理解してもらうのも難しい。相手が持つ背景や意見が、自分のそれと違えば違えば、難易度は上がっていく。だからこそ、目の前のその人自身のことばを聴けたとき、そして自分自身のことばで伝えられたとき、そこにあるのは自己満足ではなくて、「共感」だったと思う。

分科会での議論はもちろん、普段の何気ない会話の中でさえ、わからないことが苦しくて、伝えられないことをもどかしく感じるものが何度となくあった。考えが足りない、英語力が足りない、時間が足りない。自分に課される様々な制約の中で、その作業はいろいろな「痛み」を伴っていた。理解したと思った瞬間に誤解が始まるとはよく言ったものだが、終わらない追いかけっこの中で、何かを得よう、何かを紡ぎだそうと、もがいていたように思う。

### 『相手を見つめる、自分を見つける』

それでも、今になって思えば、それらの時間はとても愛おしい時間でもあった。なぜそう思えるのか。それは、「難しい」の一言で片づけてしまうのではなく、粘り強く、お互いに時間と気持ちを差し出しあい、お互いに自分自身のことばで伝えようとする意思を持ち続け、お互いに相手のことばにも耳を傾けていたからだと思う。

そうして誰かと向き合っている中で、自分との「違い」や「同じ」の発見を積み重ねて、その人について「この人はこういう風に考えるのか」と思ったり、「私

にはこんな部分もあったのか」と気づいたりすることが多かった。

ここでは、いやでも他者と向き合う。そしてそれ以上に、自分と向き合うことになる。多様な他者がいるからこそ、発見は多い。そして同時に、自分が見つけたものと同じくらいのもを、ひとに与えてもいる。日本側、アメリカ側に関わらず、あんなに真摯なコミュニケーションができたことは私自身の糧となったと思う。

### 『はじまりときっかけの集合』

事前活動から本会議まで、JASCに参加したから行った場所や、出会った人たちは数えきれない。社会の第一線で活躍する大人たちとの出会い、留学生や防衛大生、函館市の方々、小布施町の住民の方々、長野の高校生との出会い、そして何より个性的で尊敬できる仲間たちとの出会いがあり、その一つ一つが刺激的だった。一人一人との会話の中で、今まで真剣に考えたことのない社会問題が自分にとって興味の対象となり、特にアメデリとの出会いは、今まで当たり前だと思っていた習慣や自分自身の感覚も、日本で暮らしてきた私だから持っているもので、これまで無意識だった「日本人である自分」が意識されることとなった。運や縁に選ばれて、来たくて来た場所であり、出会いたくて出会った人たちなのだ。

しかし重要なのは、決してここにあるものが全てではないということだと思う。むしろ、ここにあるものは、すべてのはじまりやきっかけに過ぎない。ここで何を学び、これから何をするのか。ここで何を得て、これから何を与えるのか。会議を終えた今こそ、この会議に参加した真価が問われている。

以上が、JASCの数ヵ月を通して感じたことである。

最後に、私が本会議中に最も印象に残ったことばを紹介したい。函館フォーラムで、パネリストの尾上氏が紹介していた一言だ。

“We must change to remain the same.”

「変わらずにいるために、変わらなければならない。」

もとは映画「山猫」(1963、伊)のセリフであるが、民主党の小沢氏や多くの人が引用している。函館のフォーラムでは、日米の関係について当てられていたと記憶しているが、しかし、この「変化」は、私たち一人一人に、そしてJASCそのものにさえ求められていることではないか。

私は私であり続けるし、みんなもみんなでありつづける。そして、そのために私の人生もみんなの人生も常に変化している。JASCに参加したこともきっと数ある曲がり角の一つにすぎない。しかし、JASCという接点のうえで、確かに曲がったのだ。一度曲がればその先にはまた違う景色が広がり、新しい道が連なっていく。私たちはまだまだ歩き始めたばかりだ。

この先に何があるかはまだわからない。もしかしたら、崖があるのかもしれない。もしかしたら、山があるのかもしれない。それでも、私はこれからどんな景色が見られるのか、怖い反面楽しみでもある。

#### 高木あかり

途中で止まったままの場面は、あげればきりがなく、どれも記憶に鮮明である。思い返す度に緊張をおぼえるこれらの場面が止まっているのは、その場で唐突でもない正当な指摘があって答えに窮したからであり、それらは返答を待っている相手の姿とともに再開されるべく止まっている。

止めることが出来なかった場面もある。松代で長野の高大生をまじえた小さなグループディスカッションの進行をした際は、苦心した。限られた時間でそこにいるメンバーでたどり着きたい点があるからである。あるいは、どうすれば議論可能になるのだろうと考えていたものを、きちんと書き起こさずごちゃごちゃとしたまま迎えた本会議で忘れてかけていたことを、会議の数週間後ふと指摘されひどく驚いたこともあった。

そして、数々の場面が、未だ再構成されないまま、机の傍らに積まれている。

#### 高田修太

日米学生会議に参加して何が得られたのか、そ

の答えを自分の中で出すのは非常に難しい。会議中、一体この会議に参加する意義はなんなんだろうか、なぜアメリカなのか、そしてなぜ留学ではなくJASCを選んだのか、そういう疑問に何度も立ち向かった。そして会議中に答えは出すことはできなかった。私は特に日米関係を専攻しているだとか、帰国子女だとかではないため、アメリカである理由はそこまでなかったし、留学もしたことがなく、このような国際交流というもの初めての体験であった。しかし、会議が終わり、彼らと別れた後に再考することで、何か漠然とした答えは得られたのではないかと思う。それはやはり「1ヵ月寝食を共にし、同じ目標に向かって取り組む」という事実がネックとなっていた。国籍が違えど、1ヵ月寝食を共にすれば、当然仲が良くなるのだが、その度合いというものはホームステイや留学とはまた違ったものであろう。常に一緒にいるのだから、真面目なこと、くだらないこと、なんでも話さし、いいところも悪いところも見えるであろう。こんな国際交流は他にあるだろうか？そして今、なぜ日米なのか。それは…正直わからない。今、アメリカの注目は中国へ向いているから？そう言われることが多いが、自分自身納得できる理由は得られなかった。さて、日米学生会議と言えども、アメリカ側参加者はかなり多くの国出身の者が多いということも非常に驚いた。もちろん中国や韓国の出身者もいるし、コロンビアの学生までいた。そのような背景を持つ学生と1ヵ月濃密に交流できたことは、まさにかげがえのない経験だったと思う。そしてかなり個人的なことだが、英語力も間違いなく上がったと思う。もし今回の会議に参加していなかったら、ここまで英語を話す機会は得られなかったと思うし、英語の書籍を読んだりニュースを聞いたりして、いろんな視点を得たいとは思わなかっただろう。また、今回が日本開催だったことも自分にとって大きかった。訪れたことのない函館、長野、一方訪れたことのある東京、京都の違いは面白かった。なぜならば、アメリカ側参加者に色々説明してあげることがこんなに難しいのか、ということや、説明する中で新たな気づきを得られたからだ。日本の良さを再確認できたと思う。

## 第5章 参加者の声

ここまで真面目なことを書いてきたが、なんにせよ今回の会議は本当に楽しかった。間違いなく「会議どうだった？」と問われれば「マジ楽しかった」と答えるだろう。分科会の勉強を通して新たに得た知識、英語力、などがあつたし、一方で、学問では得られない、日本の良さ、友情、そして涙。19歳の夏は永遠に忘れることはないだろう。日本側、アメリカ側参加者の皆がいたからこそ、precious experienceができたと思う。この場を借りてお礼を言いたい。

### 高橋央樹

9月になり、あの第61回日米学生会議から約2週間が経った。普段の生活に戻ってからというもの、どこかまだ日常にはなれていない自分がいる。誰かしら近くにいる、会話が英語の非日常、途中でやめてしまいたいと何回も思った。けれど日米学生会議で得たものは数えきれず、全ては表現しきれない。それだけ私にとってのこの日米学生会議は、かけがえない人生の転機となっただろう。

そもそも私が日米学生会議に参加したのは、高校の時から興味を持っていた食糧問題を扱う分科会があったというそれだけの理由だった。応募した時は、日米学生会議の伝統、歴史を全く知らなかったし、まず自分は試験に受からないと思っていた。そんな風に半分以上諦めから入った自分の挑戦は頭の隅に追いやっていて、合格のメールが来た時には最初はよく理解できずにいた。

それからというもの、参加が決まったからには私にはやるべきことがたくさんあった。英語がめっばう弱く、分科会の知識も多数かけていたため、5月から7月の間とりあえず勉強の日々を送った。こうして毎日日米学生会議について考える日々が続くと、いつのまにか日米学生会議は私の日常の一部になってしまった。しだいに本会議ではこうしたい、ああしたいなど日米学生会議での理想を求めるようになって、きっと楽しい1ヵ月が自分を待っているという期待でいっぱいだった。

けれども本会議が始まると、私は早速うまくいかない英語でのコミュニケーションとアメリカ人との共同生活に楽しい1ヵ月の理想は打ち砕かれた。何

を言っても首を傾げる動作、聞き取れずとりあえずyeahの相槌、1週間経った頃もはや自分から話しかけることはためらうようになっていた。分科会では考えがあつても、英語という壁からただただ逃げ、一言も話さずに終わってしまう時もあった。それが本当に悔しくて、毎晩一人で悩みこんだ。

しかし会議が進んでいくと、ファイナルフォーラムでの発表を皆意識し始めたが、私の分科会では京都に来て何も進展がなかった。このままだと果たして何のために参加したのかよくわからないし、私が受かったことでこの会議に参加できなかった誰かに申し訳ない気持ちでいっぱいだった。おそらく今までの私ならば、またできない理由をかこつけて逃げていただろう。しかし今回、私は会議に対する参加者としての責任を意識していた。そして京都での夜、初めて食糧分科会で自分の意見を拙い英語で思いつき話し、ぶつかった。

こうして自分の日米学生会議はようやく始まった。最後のサイトである京都では、分科会での議論は楽しくて仕方なかった。様々な質問が飛び交い、考えは修正されていき、分科会として一つの意見になった時、これまでの会議までの4ヵ月間が全て繋がった気がした。そして何よりも議論を重ねてきた大切な友がたくさんできた。こうして私の日米学生会議はたくさんの思い出とともに終わりを迎えた。

果たしてこの経験が今後私の人生に、どのようにつながっていくのかはまだよく分からない。ただ今言えるのは、この会議を通じて少なくとも自分の中で小さな変化が起こっている。それは絶対にこの会議を通してでしか、得られなかった変化である。だからこそ日米学際会議に関わったすべての人に感謝をするとともに、来年の会議にECとして最大限の貢献をしていきたいと思う。

### 竹内友理

この一年は、私にとって全く違う一年間になっていたかもしれない。一年前第60回日米学生会議も終盤を迎えようとしていた頃、次年度実行委員選挙に立候補することについて私に全く迷いがなかったと言えばそれは嘘になる。いや、正確に言えば選

挙スピーチ時間中もまだかなり迷っていて、スピーチの順番を最後にまわしてもらった事態とまでなった。『もう、次が友理の番だよ。スピーチ、する？それとも、辞退する？』実行委員の一人が声をかけにきてくれた。

たった、一瞬の決断だった。涙声でしたままとまりのない私のスピーチは、本当に聞き苦しかったのではないかと思う。しかし人生が木だとすれば、今振り返ってみるとあの時の迷いは、確実にその中で重要な枝分かれの瞬間だったのだろう。そんな風に思える程、私にとって実行委員として経験した日米学生会議の一年は本当にかげがえのないものであった。

私にとって、第61回日米学生会議を振り返るということは日本側デリゲートとして参加した第60回の始めからの一年半を振り返ることに等しい。

第60回日米学生会議春合宿後。同じ分科会だった一人の4年生が、80文字の春合宿感想文でこんなことを書いた。

『就職活動終了後、入社までの1年間の予定を立てていたが、JASCの春合宿から帰ってきて、その予定をとりあえず全て白紙にした。JASCにひと夏かけてみようと思った。』

志高く、非常に努力家な彼が学生生活最後の春、そして最後の夏を、この会議にかけようとしていた。それを聞いてすぐ、私は分科会内もう一人の二年生メンバーに電話をかけ、そして二人で誓った。『史上最高の一夏にしよう。』

最初は4年生の彼の気持ちに伝えなければ、というどこか間接的だった意気込みも、事前活動のミーティングやフィールドワークを重ねるうちにメンバー一人一人の願いとなってゆき、5人それぞれが常に最高の分科会、最高の会議を作り上げようと心がけるようになっていた。

そして私も、自分自身最後の夏をかけるような想いで会議に取組み、全てのことを吸収しようと必死になっていた。吸収すべきことは常にあった。公式なフォーラムや分科会フィールドトリップはもちろんだが、なにより参加者である仲間達から。バスの中で将来の夢について語り合いながら、『日本人と

して生まれたからには、どんなにジャパンがパッシングされ、ナッシングになってしまおうと、日本のために何が出来るかという視点で仕事をする』と語ってくれた子。アメリカと日本で人生の丁度半分ずつを過ごし、日米ハイブリッドとしての自分とどちらでもない無としての自分を併せ持っているような感覚に陥っていた私としては新鮮な発想だった。日本って何？国籍って何？愛国心って何？また、『講演であろうと、誰かとの立ち話であろうと、常に質問することを心がけてるんだよ。』と教えてくれた子。そうだよ、人というのは大抵伝えたいことがあるから話すわけで、相手に質問すらできないというのは、失礼な話だ。自分も見習わないと、と思い、そこからは毎講演彼の隣に座り疑問に思ったことについて質問をし合うことにした。学ぶべきことは多く、とにかく日々自分が出来る100%の吸収と120%の貢献ができるよう心がけるのみ。会議の最後で格好悪いスピーチをした私に60回のみながなお第61回実行委員というチャンスを与えてくれたのも、その必死さを認めてくれたからなのかもしれない。

第61回日米学生会議実行委員となってからは、60回会議の仲間に教えてもらった以上3つの事柄を常に意識し、軸としながら活動を続けてきた。まず、『この会議に全てをかける想いで臨むこと』。実行委員8名中2名にとって、そして私達が選んだ28名の日本側参加者の中でも10名以上にとって、これが大学、あるいは大学院生活『最後の一夏』であった。彼らのためにも、最高の会議にしなければならないという使命感にかられていた。自分にとっても、日米学生会議で過ごす夏としては最後。高校の頃から好奇心の赴くままに様々な課外活動に関わってきたが、やるからには一年間日米学生会議だけに専念すると決めた。

二つ目に、『日本』、そして『日米』の位置づけについて考えること。実行委員として『日米学生会議の意義』について企業の方や他大学生に語らなければならなくなってからは特に、日々それを考えるようになった。長い歴史と二つの大国に関わることである分言葉は抽象的になりがちで、何を言ってもどこか美辞麗句に聞こえてしまうのが嫌だった。日米学

## 第5章 参加者の声

生会議に関わる以前は、『自分は国籍を超えた立場で仕事がしたい』と思っていたため、自分と日米関係についても考え直すこととなった。

三つ目に、いかなる時も吸収の姿勢を持ち続けること。様々な方が、ご多忙の中日米学生会議のために時間を割いて下さった。多くの場合、お返し出来るものなどない。大抵の場合出来ることといえば、精一杯その方々の想いを受け止められるよう努めるという一点に尽きるのであり、そんな己の無知さ、ちっぽけさを感じるに当会議は最適の場所なのであった。

副実行委員長として携わることとなった日米学生会議の中で、私は分科会、函館開催地、そして委員長松本との自主共同企画として立ち上げたサハリン研修等様々な角度から第61回の会議形成に関わる機会があった。1カ月の会議がどのように展開し、創設から75年という日米学生会議の歴史の節目にどのような軌跡を刻むのかということは、私達一人一人の想像力とそれを形にしてゆく行動力にかかっていた。面白いことに実行委員になると本会議の1カ月は日米学生会議の終盤であり、参加者にとってのドキドキワクワクの本会議開幕一日目の終わり、は私達にとってのJASCカウントダウンでOne Day Downの感覚であった。だからこそ第61回日米学生会議、について考えたときに思い起こすことの多くは参加者の56人が知りもしないような瞬間であったりもする。何百もの選考論文の山に囲まれていた日々。Excelが使いこなせず、全ての書類をWordで仕上げてしまう私に苦笑する松本の顔。選考論文課題の細かい言葉遣いについて何時間も議論したミーティング。そして涙を見せるものが出てくるほど真剣にこの会議に対する想いを語り合うことになった、ファストフード店での合宿反省会。

『で、どうだったの?』第61回日米学生会議も終わり二学期に突入して間もなく、友人に聞かれた。

『どうだった、って?』

『やりたかったことは全部達成できたの?』

その軸でいえば答えは残念ながら否である。達成出来たこともあれば、取り返せぬ後悔の念が残り悔

しくてたまらないこともある。実行委員としてはどんなに苦しくても笑顔でいたい、なんて思っていたのに、ある夜の事故で頭から血を出して他の実行委員に心配をかけてしまったこともあったし、最後にもらった分科会メンバーからの手紙には「・・・でも時々心配になることもあった。体だけは気をつけてね。」とあった。まだまだ力不足だなあ。

沢山挙げ連ねてもきりも意味もないが、やり直せるならば改善し得た点は当然多々あったと思う。

ただ、それでも今第61回日米学生会議が素晴らしいものであったと思えるのは、単なる時間経過による経験の美化ではない。ひとつには、この会議を通して参加者の様々な顔を見ることが出来たから。あの子が悩んでいることを正直に話してくれた瞬間、悩みを克服できた瞬間、この子が真剣に「自分の思う日米学生会議」について、語ってくれた瞬間等、様々な表情が、貴重な日米学生会議の財産として私の脳裏に焼き付いている。そしてもうひとつには、精一杯この会議を駆け抜けたという達成感があるから。8月21日は、お正月の箱根駅伝で自分の区を走りきり次の走者へとバトンを繋いでトラックへ崩れたランナーのような気分だった。気持ちの悪い久しぶりの静けさと、『おわった・・・。』という解放感に包まれる安堵の一時。暫くするとまた全力で走りたくなってしまうのも、ランナーみただなあ。

日米学生会議の75年。毎年、こうして夏学生が集まっては、様々な経験をしながら素敵な仲間となってゆく。その中で選ばれた16名の実行委員は、一夏を共にした友に見守られ、その応援を受けながら次のゴールを目指して走るのだ。こんな風に、自分の会議を終えると改めて日米学生会議の縦の連鎖を意識するようになる。会議準備にあたり読み込んだ過去何十年分もの報告書からは、世代・参加会を超えて共有されている感情の数々（会議後に残る、なんとも言えない虚しさなどは誰もが経験することだろう）があることが分かるし、何十年前の『参加者の声』もまるで自分のことのように共感でき、涙・笑い・悔しさ・充実感等、全てが伝わってくる。日米関係の位置づけに対する危機感や日米学生会議のもつ課

題についても、過去数年間の実行委員全員が直面しているものなのだ。だからこそ日米学生会議では実行委員は勿論、参加者も『史上最高の回にしよう』という虫の目より、『史上最高の会議にしよう』という鳥と魚の目を持つべきなのだろう、と今思う。

……さて、ここまで冷めきった紅茶を飲みながらこの一年の経験を言葉にしようと試みてきた。書こうと思えばあと報告書10冊分は書きたいことがあるけれど、ここでやめるのは内に秘めておきたい想いや思い出があるからでもあるけれど、上手く文章化できないからでもあり、また仮に出来てしまえばなんだか本当にそこで第61回日米学生会議が終わってしまうような気がして寂しいからでもある。

ただ一つ言えるのは、『偶然』『必然』何れと呼ぼうが、この一年半なくしての私は間違いなくひどく違った私であったということ、そしてそんな自分は想像したくもないということ。今後、日米学生会議にかけたふた夏、そして一年半という期間は人生の分数にすればどンドンどンドン数を小さくしてゆく。しかしながら私にとってその経験の重さは一生涯、大きくなり続けてゆくものだという期待と確信を持って、私は次へと襷を繋ぐ。

私の活動を支えてくれた両親と昨年会議に応募した当初から応援し続けてくれた祖父母、私が会議運営に力を入れることを許してくれたディベートのパートナー、分科会に関連する新聞記事を送ってくれたり辛いときに電話で何時間も相談に乗ってくれたりしてくれた60th JASCのみんな、様々なアドバイスとサポートをして下さった財団法人国際教育振興会の皆様、本当にありがとうございます。

そして何より第61回日米学生会議のみんな、ありがとう。

この一年間一緒に走り続けてきた実行委員のみんな、本当に有難う。何時間も夜中に電話しながらサイト計画作業をした、知識人豪。新しいアイデアを真っ先にシェアしたくなった、実行委員会の爆発剤光滋。笑顔で癒してくれてミーティングにも電話参加を続けてくれて、選考中夜遅くまで相談に乗ってくれたもっちゃん。「妹よ！」と最近はまだ呼んでく

れないのは、妹のような可愛げがなくなったから？優しい恵輔。どんな時も冷静さを忘れず要所所で導いてくれた、えみと、「ゆりゆり企画」と盛り上がりたり電話で悩みを相談し合ったりしたおゆり。ガールズ頑張ろう！って励まし合ったね。そしてサハリン企画実現目指して一緒に熱くなり、きっとこの一年間一番沢山話した、チェア秀也。いざとなったら絶対頼れるチェアだったからこそ必死で頑張れたんだと思う。バイスから言うのもなんだけど、61回は素晴らしいチェアに恵まれたと思うよ。会議が終わり、この8人、そしてアメリカ側実行委員8人を交えた16人での議論やメールが途絶えてしまうことの寂しさは、予想を超えるものでした。みんなと仕事が出来たこの一年間は私の一生の宝物です。またいつか、一緒にいいもの作り上げよう！

第61回日米学生会議という箱の中身となり、それぞれの個性で虹色に飾ってくれた参加者のみんな、本当に本当にありがとう。みんなと出会えて幸せです。Once a JASCer, Always a JASCer. まだまだ、これから。一生、よろしくね！

#### 田中 豪

森鷗外は小説『かのように』(1913年)のなかで、神話を歴史から区別するべきかと苦悩する青年を描いた。では、歴史と神話を区別することとは何を意味するのだろうか。日本は明治維新を経て近代化を成し遂げ、西欧諸国の仲間入りを果たした。その過程において、天皇制や国家神道が国家の軸に据えられ、それに適合しない文化は切り捨てられ、日本人は日本人として一つにまとめられ、国民国家が形成された。富国強兵のためには、「国民」という観念が必要であり、大日本帝国は国民の紐帯として矛盾のない神話を創造し、歴史へと昇華させた。青年秀磨は思い悩む。神話に対する実証的な切り崩しを試み、近代化の原動力である国民の紐帯をなす基礎が神話、すなわちフィクションに過ぎないと証明し暴露すべきかと。もし暴露の先には無秩序しかないのだとしたら、その行為にいかなる意味があるのかと。未来のない非生産的な破壊行為に手を染めるくらいなら、目前の矛盾に眼をつぶるほうがましなのでは

## 第5章 参加者の声

ないかと。小説の中では「山の手の日曜日の寂しさが、二人の周囲を依然支配している。」と結ばれ、森鷗外はこの問いに対する明確な答えを与えてはくれない。

しかし、その答えを見つけることを促すかのように、『かのように』は私の中の二人の自分に質問を投げかけた。一人は日本人としての自分。そしてもう一人は日米学生会議実行委員としての自分である。

2008年夏に第60回日米学生会議の参加者として始めて渡米した。参加者の中には、生まれてから20年間を同じ土地で過ごした私のような日本人もいれば、人生の半分をアメリカで過ごした日本人もいた。生まれてから一度もアメリカを出たことのないアメリカ人もいれば、小さいときに両親と一緒に外国からアメリカに移り住んだ人もいた。学生会議で訪れたボストン市役所で受けた選挙課からのブリーフィングによれば、投票の数を増やすために、市は英語の読めない移民向けに各言語での投票用紙を作成している。エスニックコミュニティから投票所までのバスを手配することさえあると言う。一方で日本を見れば、戦後60年を経た今も在日韓国・朝鮮人の方は選挙権を持っていない。日本人・アメリカ人と言っても、それはそれぞれが拠って立つ制度に大きく依存している。制度とはその国の神話を含めた歴史や文化の集積でもある。そして、選挙権の例で言えば、同じ民主主義という理念でも、その実践の方法は地域によって異なり、同じフィクションでもその運用をめぐりさらに分化していく。出入国手続きの際、税関でパスポートを手渡す。自分の持つパスポートに記されたa Japanese nationalとはどう定義されるのだろうか。

自分は彼らとは違う。そう思って自分は日本人だと強く感じる瞬間もあった。自分と彼らが同じものを見て、同じように感じていると実感したときもあった。それまではこうした共通点や相違点が存在することは偶然の産物だと思い特段の理由付けを求めなかったにもかかわらず、あらゆる差異が他の隠された何かに基礎付けられているのではないかとすべてが急に気になりはじめ、こうした考えを避けることを許そうとしない自分がいた。一方で、The

World is Flat (Thomas Friedman)と言われ、スカイプを使えば、太平洋を隔てていてもほとんどタイムラグなく会話できるという厳然たる事実もある。こうした事実を前に、自分の問いが果たしてどれだけの意味を持つのか、とさらに問いかけると、日本人としての自分はますます答えから遠くへと離れていっているのかもしれない。

第60回会議が終わるやいなや、第61回会議実行委員として新たなスタートが切られた。広報を担当し、日米学生会議を外に売り出していく役目を担うことになった。役柄上、よく聞かれた。「日米学生会議って何ですか」「参加するとどんな体験ができますか」「参加する意義は何ですか」…。また、日米学生会議は社会発信を理念に掲げ活動している。何を社会発信するのだろうか。社会発信の先に何があるのだろうか。そう簡単に答えの出せる問いかけでないことは分かっていたものの、答えを出さずに活動することに逡巡した時もあった。自らの語る言葉が神話にすぎないのではないか。もしそうだとしたら、神話を神話と分かって伝えることは道義的に許されるのかと。しかし、一方では、その神話があるからこそその日米学生会議であり、神話は出発点であり終着点であるとも言えるのかもしれない。その二つの考えの間を振り子のように、時に右に触れ、時に左に触れ、神話の神話性を前に立ちすくみながら活動してからおよそ1年が経ち、第61回会議は2009年8月に京都で終わりを告げた。第62回会議の実行委員も決まり、次の世代にバトンを受け渡す。責任と神話と歴史とともに。

たしかに答えを見つけることはできなかった。しかし、この一年間を通じ自分の中で変化したことが一つある。神話ではないかと疑い、それを伝えることを怖れたかつての自分はもうそこにはもういない。たとえそれが神話だったとしてもそうでなかったとしても、自分が誇りを持って次の世代にバトンを渡したという事実がある。では、はたしてこれは質問に対する答えとなっているのだろうか。小説の中で秀麿からの手紙を受け取った父は次のように語る。「神話を歴史だと思わず、神霊の存在を信ぜず、宗教の必要が現在において認めていられるか…

と推察せられる」。神話や歴史といった個別事象から宗教と信仰という形而上学的な段階へと質問の次元を転化させただけではないのだろうか。もしそうだとしたらその転化はいかなる意味を持つのだろうか。かつての問いは新たな問いへと形を変え、実行委員を終えた今もなお日米学生会議実行委員としての自分へ問いかけ続ける。

日米学生会議への参加を通じて、二人の自分に対して投げかけられた問いのいずれにも私ははっきりと答えられていないのだろうか。『かのように』に戻れば、秀麿はドイツ留学中にハナルックと出会い、ドイツの強さとは、元来宗教すなわち神話に基づいていることだと感じた。日本に帰ってきてから再びこの課題に思い悩み始めたとしても、彼はドイツでは一度ある種の答えを見つけたのではないか。

民主主義を高らかに唱え、理念の下に結集しているといわれる国、アメリカ。宗教がドイツの強さだとしたら、こうした理念がアメリカの強さなのだろうか。だとすれば、日本の強さとは何なのだろうか。そしてその土地に21年間住み続けてきた自分自身はいかなる存在なのだろうか。こうした思いから、私は2010年の夏から一年間アメリカに留学することを決意した。この先に何があるかは分からない。しかし、不思議なことに、その先に何があろうとも怖さはない。その勇気は日米学生会議が教えてくれたことなのかもしれない。

#### 谷口貴大

私たちはヒーローになれるだろうか。私たちはこの世界に生きる66億を超す人間のたった1人に過ぎない。私たちは何千年という人類の歴史の中で、長くとも百年ほどしか生きることができない。私たちが知っていることは世界に溢れる情報のうちのほんのわずかである。私たちは1人の学生であり、何の社会的な権力も持たない。そんな、たった72人の日本とアメリカの学生が、机を並べて世界や社会について論じあったところで、それらは何か変わるだろうか。一体、日米学生会議、JASCの意義とは何なのだろうか。本当に、私たちは世界を変えるヒーローになり得るのか。

2009年の夏、私は尊敬する71人の仲間と出会い、数えきれないほど多くの貴重な体験をすることが出来た。ここにその全てを記すことはできないが、それらは、私に私の知らない世界を見せ、私の価値観を大きく変え、きっと未来の私を変えていく。しかし、私を変えたのは私ではない。JASCで出会った71人の仲間に、行く先で出会った人たちに、経験した多くの出来事に、私は「変えられた」のだ。私が見たのは彼らの、それらのある一面に過ぎないだろう。しかし、確実に私を変えた。そして、私以外の参加者も、きっと同じように変わった。多くの人と出来事を伴ったJASCという時間は、その中で私を変え、仲間を変え、そして、JASCの経験と記憶は、私たち参加者それぞれが将来出会うであろう人々すら変えていくのだろうか。個人が持つ力は、他の個人にとって大きな大きな意味を持つ。JASCで学んだことのひとつだ。

多くの考えや情報が渦巻き、ひとつであるはずの事実を捉えることすら難しい現代の社会で、私たちはひとつではない真実を、その本質を求めていかなければならない。それらすべてを手に入れることは不可能なことだろう。それでも私たちは、一人の人間として生まれた以上、それらを求め続けてゆく。その過程で個人が導き出す考えや結論は、その個人の経験を通し変わりながらも、ある時、ある場で出会う人々の価値観を変え、さらに彼らが出会った人々の価値観を変え、ひいては社会を、世界を変える可能性を秘めている。その時、その場がJASCである必要性はどこにもない。しかし、JASCには72人の個々に変化をもたらしただけの出会いが、体験が、確かにあった。多くの個人の価値観を巻き込んだアイデアが、世界の多くの人々が待ち望む変化を社会に引き起こした時、その一要素たり得た個人はヒーローの一人であるに違いない。一人の人間の大きな変化は、世界の変化の小さな始まりである。

共にJASCを過ごした仲間に、私の思いや信念は伝わったのだろうか。それは私にはわからない。しかし、それを知る必要はないとも思っている。私は真剣にJASCに向きあった。JASCは私を変え、仲間を変え、そして私たちはこれからも共に時を過ご

## 第5章 参加者の声

す人々に変化を起し続ける。2009年の夏、私は一人のJASCerだった。

### 谷原英利

僕にとってのJASCとは何だったのか。正直それが今なおよくわからずにいる。短かったようで長かったようなこのひと夏の思い出からは何を得てまた失ったのか。JASCがlife changing であるとの数々の前評判がそもそもの参加理由となった訳ではあったが、僕は果たしてそうだとはっきりと言い切れるだけの楽しく有意義な時を過ごせたのか。やはり自分の中でまだきちんと整理ができてはいない。ただし、これだけは断言できる。この場を通じての幾多の出会いが今後も絶えず折に触れて僕に知的刺激を与える何物にも代え難い生きた財産として残り続けるだろうということである。個人的には、これこそがJASCの最大の魅力に他ならないのだろうと結論付けている。

### 趙潤華

JASCを振り返ってみる。初めての顔合わせ。単純に、みんなすごいなあ。やる気も実力とユーモアも兼ね備えた人がたくさんいる！そして初めて会ったとは思えないほど一緒に居ることの楽しさ、わくわく感を感じたが、それと同時に何か違和感のようなものも感じた。何だろう。事前活動。OBOGの方達との交流や分科会でのフィールドトリップ。だんだんJASCに所属している感が増し、自分の中での位置づけが少しわかってきた頃で、でもまだやる気全開！という訳ではなく、RTペーパーやプレゼンの準備をこなしていた。ただ、早く本会議でみんなに会いたいという思いは募っていた。ちょうどその頃にあったサハリン訪問。まさか「日米学生会議」に参加して、ロシアの地を踏むとは思わなかった。全員が参加した訳ではないが、参加したデリとは宗教の話からダイエットの話まで、お互いについても全く関係ないくだらないことについても話す時間を持って、さらにサハリンという異国情緒もあり、とても濃い経験であったと思う。そして直前合宿と本会議。この1ヵ月間は、短いようで長

かった。お互いをそんなに知らない人達と、こんなに常に一緒にいるなんて初めての経験だった。毎日が刻々と過ぎる一方、一日一日誰かしらと議論したりふざけたり学んだり発見したり興奮したり落ち込んだり、していた。なんといっても、ストレートフォワードな人が多い！そして小さい所まで見ている！今まで気付かなかったことや気付いていても知らん顔していた事実を正直にストレートに言うし言われるしという環境であった気がする。おそらくこれが、私が始めに感じた「違和感」だったのかもしれない。長い付き合いの仲という訳でもないのにここまで言い合える関係に、最初は慣れなかったのだ。その気持ちもすぐに消し去られ、それこそがJASCerたちであるという事に気付くまで、全然時間はかからなかったが。

まとめると、考えれば考えるほど、JASCイコール「JASCで出会った人達」であったのだ。これまで、「何をやるか」も重要だけど「誰とやるか」がもっと大きな意味を持つと考えてきた私にとって、JASCはそれをきれいに立証してくれた。RTミーティングや数々のフィールドトリップ、スペシャルトピックス、カフェでのおしゃべり、ホームステイ、かなりがちでやったサイクリング、キャンプでの川の字睡眠、イカ講義、炎天下でのトマトの収穫、移動バスでの爆睡と真剣な話し合い、等等。ふと思いつく限りでもたくさんの事を経験したのだが、それらが頭にこびりついて思い出す度に様々な感情が湧いて来るのは、この61回のみんなとの経験であったから。色々なイベントを通して学ぶ所は多かったが、その中で参加者や関係した人一人一人からの学びと発見こそ、私にとっての日米学生会議であったのかもしれない。

私はJASCを通して、常にお腹が痛かった気がする。一つは食べ過ぎ、そしてもう一つの理由は、笑い過ぎ。この二つが原因で悩まされるとは思ってもみなかったが、腹痛の記憶と共に、JASCでの出来事や出会い、それを通して考え感じたことは、頭のどこかからずっと離れないだろうなあと思う。JASCを通して私と少しでも関わりを持ち接してくれたみなさん、ありがとうございました。大好きです。

## 徳地宜子

日米学生会議は私にとってとても奇妙な経験であった。その経験が果たしてどのような意味があったかはまだ分からない。兎にも角にも、それはあまりにも多くの人のプラスのエネルギー、マイナスのエネルギーが充満した、得てして非常に人間的な経験であったと感じる。そこには人間が生きていくうえで必要な衣食住より、もっとある意味高次な、ある意味無駄な、プラスアルファがあった。それが日米学生会議という箱が提供してくれたのか、若さと暇を持って余した72人が集うことで生まれたものなのかは定かではない。しかし、日米学生会議にはある種特別な空気が流れていたのは事実である。そこでは絶えず自分にとっての日米学生会議が語られ、それから派生して、自分の夢や弱さ、過去の傷や栄光、そして生きることの意味について、たかだか二十歳そこいらの若者が睡眠時間を削り、大真面目に語り合うのだった。そこに日米学生会議の真髓があったと感じる。日中、我々は様々な講義やイベントに参加し、日本、米国、そして世界の政治や経済について理解を深めた。また、分科会においては、時には協力し合い、時には敵対心を丸出しにし、各々のテーマについて熱弁した。しかし、それらは日米学生会議が本来有してあるはずアカデミックな一面を付与するという役割を果たしつつも、会議自体が経験者にとってどのような意味を有しているかを考える際には、残念ながら議論にあがらない。それは経験者にとってなら本質的なものではないからだ。経験者にとって、日米学生会議とは楽しみ、悲しみとともに人間の美しさ醜さが詰まりに詰まった、自らを映し出す鏡であった。我々は自らを絶えず振り返り、新たに自分を定義づけた。10年後振り返った際には、日米の政治よりも、アフリカの貧困よりも、イカの生態よりも、自分はこういう人間かもしれないという思考プロセス、そして、その思考プロセスを可能にした生涯にわたる友人が残るのみであろう。日米学生会議とはそのような経験であった。

## 中村誠一郎

何か特別なことがしてみたい。日常を過ごすだけ

では感じられないものを感じられる経験をしてみたい。自分の力を試すような場所へ挑戦してみたい。そんなことを考えていた私は、稀有な幸運に恵まれ、JASCと出合った。参加が決まった春の日のことは今でも忘れることが出来ない。

春合宿で出会ったメンバーは、私の目にはとても眩しく映った。こんなスゴイやつら仲間になれるのか、と思うと本当に嬉しかった。と同時に、皆に負けていられないとも感じていた。高みを目指す皆の中で、ヘラヘラして終わるのはつまらな過ぎる。

JASCで一番大きかったのは、個性豊かな参加者と出会い、友人となれたことだった。そのおかげで視野を広げることが出来たし、自分の現状をこれまでよりも深く知ることが出来た。会議の期間中、自由な時間も、楽しい時間を共有するだけで終らず、それぞれの将来について語り合うこともあり、新しい考えを知ることの連続だった。

これほどまでに価値のあることを一緒に出来る仲間を、絶対に失いたくない。JASCはそう思わせる人たちで一杯だった。

それはアメ德里にも同じことを感じた。拙い英語を使っても、皆私が何を言おうとしているのかを理解しようと努めてくれた。おかげで、英語に対して臆病になっていた気持ちは会議に参加する前に比べてずっと小さくなった。帰国するアメ德里たちと別れるときがあれほど辛いものになるとは、思っていなかった。

JASCはチャンスで溢れている。そしてチャレンジする者を、周りの者はまず応援する。必ずしもいい結果が得られなくても、励ましや次に繋がるアドバイスを与える人間が沢山いる。私が思うに、それはそれぞれが今までチャレンジし続けてきた人間であるからだ。挑戦することに意味がある事や、挫折する時の気持ちを良く分かっているんだろうな、と思った。

しかし会議が進んでいくにつれて、私の中で疑問もまた増えていった。

考え方は一人ひとりがそれぞれ違うのだから、まして母国を異にする学生同士が一つの結論を導き出せるのか。諦めそうになることなどざらだった。自

## 第5章 参加者の声

分が会議に参加する意味を見失い、会議の意味が分からなくなることもあった。

この会議のもつ、思い出作りや仲良しパーティーの学生交流との違いは何なのか。

それはやっぱり、集まった参加者が障壁を乗り越えながら議論を重ねること自体であり、一期一会のメンバーと協力した結果を何とかして出すこと、そしてこの後もずっと続いていけよう、前へ進み続ける者たち同士が素晴らしい関係を構築すること、だと私は思った。そのために限られた時間をフルに使って、話して、悩んで、泣いて、歌って、笑って、踊って、飲んだりするんだろう。

その意味で、私はJASCのフルコースを存分に楽しんだ。苦しかったことも、辛かったことも今となってはあの夏、あの仲間たちとしか共有できなかった輝かしい経験だと思える。会議の最中に出来ずに悔しい思いをしたことも、日常生活では得がたい貴重な体験で、次の一步に繋がる大切な出来事だ。

真っ暗闇でのアメデリ歓迎、皆で騒いだ六本木、函館で見た夜景、ギャグ満載の自衛隊員の格好をした写真、小布施町での浴衣のコスプレ、長野の花市、かもられたUFOキャッチャー、さくらを歌ったタレントショー。数え切れない楽しかった出来事を思い出して、やはり感じることもある。春合宿でのリフレクション、口に出した後、後悔した恥ずかしい言葉。でもやっぱり会議が終っても同じ言葉が頭に浮かぶ。

そういう貴い気持ちを持たせてくれたJASCに、参加者の皆に、そしてこの出会いを私に運んでくれた先輩に感謝を。

会議の中で、私達をもてなしてくれた多くの人々に敬意を。

新たな決意を胸に、吹き荒れる風を予感し、嵐の中へ飛び込んでゆく。

今まさに、新しい旅がはじまる。

### 中村梨紗

午後2時、1時間昼寝しよう、そう思った。約1ヵ月ぶりに足を踏み入れる自分の部屋は何一つ変わっていない。目覚まし時計を午後3時に設定し、ベッ

ドに入る。JASCでの思い出を心の中で描く余裕もなく、ただただ疲れて眠りについた。

午前10時、1時間の昼寝は、超強力な目覚まし時計をも無視する20時間の睡眠に変わっていた。眠気も疲れも何もない。あるのはただこの思いだけ。「あれは夢だったのだろうか。」

JASCが終わり、ひたすら考えた。JASCとは一体何だったのか。何故あの場に私はいたのか。何故あのメンバーが集まったのか。何故あの時期に、あの場所で1ヵ月を共に過ごしたのか。私はそこで一体何を得て、何を失い、そこから何を生み出せるのか。

日常に戻り3週間が経った今、それを未だに考えている。「日米間の、そして世界の平和構築に貢献できる人間になる。」おそらくその為に私は参加したのだろう。しかし、その一行では取りきれない何かが、答えを出させまいとしている。

ただ確実なことが二つある。それは、JASCで私は自信を失い、そして、友人を得たということだ。

失ったもの、自信。これは自分の弱点が明らかになったからである。伝えたいことがあっても、それを言葉にし、公の場で発表することができない。いや、正確に言うと「できない」のではなく、「しようとしない」のだ。約1ヵ月の会議中、多くの講演や、フォーラムが開催された中で、私は一度も発言しなかった。自分の中にそびえ立つ壁を壊す機会がどれだけあったらと思うと、悔しくて仕方がない。挑戦しない自分に、苛立ちを覚え、自信を失った。

しかし、それは必ずしもネガティブなことではない。弱点が明らかになったことにより、成長の兆しが見えた。今しなければならぬことはただ一つ、挑戦すること。第61回会議のテーマでもあった「発信」することの重要性も今一度確認し、これから実行に移したい。

失ったものがある一方で、得たものもある。それは、どんなに年老いても、どんなに離れていても連絡を取り続けたいと思える友人だ。皆個性豊かで多に刺激を得ることができた。幼稚な感想文のようになってしまいが、事実なので仕方がない。彼らに出会えて本当に良かったと思う。

3週間が経ち、これら二つが明らかになった。果たして1ヵ月後は何を思うのだろうか。半年後は何を考えているのだろうか。1年後は、2年後は、この夏の出来事がどう作用しているだろうか。10年後、20年後は、JASCで体験したことを覚えているだろうか。自分自身に、そして社会にどう影響を与えていくのだろうか。

今はまだ分からない。おそらく、時が経てばきっと分かるようになる。ただ、単に時間を過ごすのではなく、挑戦し続けることを前提として。そして、理解できるようになった頃には、またこの夏出会った仲間たちと語り合っているに違いない。

#### 中村真理

今改めて、JASCを振り返る。とは言ってもそれは、Facebookに並んだ笑顔の写真達を眺めることで、アメデリとメッセージを送り合うことで、そして自分の記憶に在る気に入った場面を反芻することで。その度に私のJASCは何かとても良いものに書き換えられている気がして、もしかしたら自分にとってのJASCの全てを、きらきらした時間や、想いや、満たされて流した涙に変えたい気持ちが強いかもしれない。

けれどいつもそこで我に返って、この4ヵ月のことを、一つ一つ正直に振り返ってしまう。

JASCerに出会った春から、本会議直前までずっと、多すぎる自分の課題に直面して、幾度となく立ち止まってしまったこと。アメデリが日本に来た夏、言葉の壁を越えられずに委縮してしまい、気付けば活躍する誰かをひたすら見ていたこと。キャンパスでの日常から抜け出たくて、主体的に色々な人や物事に会いたくて、考えて、悩んで、頑張っ、この1ヵ月を掴むことが出来たのに、思い入れが強いにも拘らず機会を生かせない自分への悔しさや、経験も能力も豊富な皆への羨ましさでいつも一杯だった。だけれども同時に、いつからか「挑戦」にこだわるようになった自分と、勇気を出して行動することが出来た瞬間も、今、確かに思い返すことが出来る。沢山の辛さの中に、少しの誇らしさと、嬉しさと。この4ヵ月はきつと、一つ一つの感情が、

普段よりも強く、意味深く、押し寄せた期間だったのかもしれない。

JASCとは、単に気の合う仲間との楽しい時間の連続ではない。満足も、達成も、笑顔も、理解も、当然ながら自動的にやって来てくれる場ではない、と私は実感している。それは一人一人が生きる日常や、一生と同じように、そして様々な人生が重なり合う社会や、世界といったものと同じように、「正解」が無いものに向かって、困難やフラストレーションに耐えながら、それでも諦めることなく思考し行動することが求められる場なのだと思う。この当たり前に大切すぎて、だからこそ心掛けることが難しい姿勢の必要性が、JASC中は特別に際立っていたように思う。現状を変えたいのならば、どう在ってほしいのか、どうしたらプラスの変化を起こしていけるのか、そのために何をすべきなのか、まず自分が考える。そして悩み考えた意見を、熱意を、言葉にして相手に伝える勇気と方法を体得し、また相手についても学ぼうとする気持ちを常に表現すること、何より論破されることを怖れないこと。そうして自分が他者と、周り、皆と一緒に、行動を起こしていくこと。諦めなければこういった「人」が持つ可能性を最大限に高められ、日常から世界へ向けて変化を起こすことが出来る場所、がJASCなのだと思う。

第62回日米学生会議の実行委員として、この姿勢を持ち続けることを忘れないようにしたい。そう強く思うのは、JASCを通して困難にぶつかり、辛さや悔しさを味わうその度に、何かが、そして誰かが必ず乗り越えるための手助けをくれ、この時に感じた「温かさ」や「大きさ」に加え今では辛ささえも含めたJASCの魅力が、決して私を離さないからである。そしてふとした瞬間にJASCに懸ける驚くほどの熱意と努力を見せてくれたECの皆と、ふとした言葉で新たな世界を見せてくれ触発してくれたデリの皆の存在が、私に諦めることをさせないからである。日米関係の意義が問われるこの時代において、「人と人のつながり」「そこから生み出される沢山の機会と経験」「仲間」といったJASCの持つ財産を引き継ぎながら、JASCに良い変化を加える一人になれるよう、挑戦と努力を重ねていきたい。

## 第5章 参加者の声

最後になりましたが、JASCの継続にご尽力くださり75周年という節目に私達を迎えてくださったアラムナイの方々、第61回会議のためにご協力くださった全ての方々、そして姿勢や言葉を通して沢山のことを教えてくれた実行委員の皆、共に‘life changing summer’を過ごした参加者の皆に心から感謝しています。どうもありがとうございました。

### 西野 緑

私にとってJASCは元々父親の背中のようなものでした。私はいわゆるJASCer2世で29回、30回OBの父親を持ちます。父親の存在は憧れであり、そんな父が大学時代の誇りとしているJASCもまた、私にとって手の届かはずもない別世界のはずでした。だからこそ、私の直前合宿で提起した目標は「父のものであるJASCを自分のものにする事」だったのです。

そして今、慌しく過ぎて行った61回JASCを終えて、私ははっきりとJASCを自分のものにする事が出来たと言えます。それは自分がJASCの中で満足の出来る成果を上げられたかとか、学生時代の父親に追いつけたかとかそういうことではなく、でも少なくともあの1日1日を他の誰でもない私が精一杯生ききったと思えるからです。

JASCは私にいろいろな意味で自身のアイデンティティーを考える機会を与えてくれました。まず、日本開催であった61回JASCで、アメリカ側参加者をゲストとして迎え入れる立場になり、改めて日本人として自国を見つめなおせたと思います。東京だけが日本ではない。地方に目を向ければ多様な顔があるのだ。と、分かっているつもりではいたものの、頭で理解するのと実際触れて感じるのでは全くの別物でした。特に長野県の小布施町でのホームステイでは、葛飾北斎館の創設に携わられた方のお宅でお世話になり、日本の伝統を守ろう、そして次世代や世界に伝えていこうという熱い想いをひしひしと感じました。このような市町村規模、そして個人規模の努力が日本という国を形成し支えているのでしょう。JASCのプログラムはその事実を再認識させてくれました。

今日の東京を中心とした日本は安易に世界に目を向けすぎている気がしてなりません。私は地球市民教育という分科会に所属していましたが、真の意味での“地球市民”とは自国を認識した上で、他国を捉えられる人間であると思います。グローバリゼーションとローカリゼーションは連動してこそ初めて安定した地域間(国家間)の関係につながるでしょう。春合宿から分科会のメンバーで議論し続け、定義し続けてきたこの“地球市民”の概念を忘れることなく、自分自身もそれに少しでも近づけるように努力を続けていかなければいけないと思います。

また、JASCの特徴である参加者の多様性も、自分のアイデンティティーを再考出来た1つの要因です。理系の人がいれば文系の人もいて、政治を専門とする人がいれば医療を専門とする人がいる。このような特殊な環境があったからこそ、ディスカッションにおいてはもちろん、普段のやり取りの中でも様々な観点からのアプローチがぶつかり、面白い化学反応を起こしていたように感じました。

そんな中、自分の役割が見えなくて悩んだり、これまでの考えの浅さや知識の欠如に落ち込んだりする事も多々ありました。しかし、互いに励ましあえる仲間に恵まれていたからこそ、その事実を前向きに向き合えるようになりました。今はJASCの経験を原動力にして自分の専門性を磨き、意見を洗礼していきたいと思っています。

今こうやってゆっくりとした時間の流れに身を任せていると、いろいろなものが凝縮されていたあの1ヶ月が嘘のように思えます。しかし同時に、JASC前の自分とJASC後の自分の意識の違いもしみじみと実感することが出来ています。2009年夏は一瞬にして過ぎ去ってしまったけれども、第61回日米学生会議の仲間はこれからもJASCの名の基に繋がりを続けるでしょう。そして私個人も、JASCを応援してくれた各地域の人々やこの夏出逢った仲間、また“自分のものとなったJASC”“それ自体に恥じないように、一生挑戦し続けていきたいと思っています。

### 野津美由紀

JASCは不思議な場所だった。春合宿からそう感

じていた。というのも、猫かぶりのプロで、新しい場所では半年以上演じる私が、JASCでは初めから全開でいけたからだ。それも無理して開いたわけではなく、自然とそうさせてしまうのがJASCだった。どんな人でも受け入れることのできる、器の大きい人たちが揃っていたように思う。72人のそれぞれ異なる奇妙な色が混じり合い、見たことのないような明るい色が漂う、そんな独特な場所、空気感が私は大好きで、1ヵ月の間本当に居心地がよく、会議中一度も帰りたと思うことはなかった。JASCに参加していなければ、この71人のほとんどと一生会うこともなかっただろうと考えると、何とも不思議で、改めて出会いの面白さを感じる。

本会議中、多くの時間を過ごした分科会は笑いの絶えない本当に素敵なグループだった。本会議前のぎこちないSkype meetingや、本会議開始後早速日本側とアメリカ側で意見が衝突して気まづくなったことが信じられないくらい、壁のない分科会となった。正直に言えば、分科会での議論はやはり1ヵ月という限られた時間の中で学生ができる程度のもを越えることはなかったが、それでも分科会は有意義だったと思っている。理由として、まず、自分の興味が広がったことが挙げられる。この分科会に所属するまで、そこまで興味の無かったBRICsであるが、事前準備やフィールドトリップを通じて、今では各国の名前を見るだけでテンションが上がってしまう。新興国、完全に鬼アツい！また、議論の中で日本側とアメリカ側の視点の違いを感じられたのも貴重な経験だった。例えば、BRICsの急成長に対して、日本側は「どうすれば勝ち残れるか」と必死になりがちなのに対し、アメリカ側は「アメリカは落ちてでもせいぜい二番手」くらいの余裕があり、焦りの度合いに違いを感じた。当たり前ではあるが、同じ先進国でも日本とアメリカの置かれる状況は異なるのだなと感じることが多く、その上で共通のゴールを探すのは難しかった。

JASCで意外な収穫だったのは、他人、特にバックグラウンドが大きく異なる人々と生活を共にしたことで、自己をより理解できたことだ。JASC参加前は、考え方の違いは結局のところ個人差で、アメ

リカ人と日本人という大きな区分による差異はないものと思っていたが、アメドリと語らう中で、自分の考え方がいかに日本製であるかを思い知らされた。特に将来について話した際に、私はいわゆる「日本的なルール」にためらいなく乗ろうとしていて、夢もそこからはみ出ないよう、無意識に小さく押し込めていたことに気が付いた。アメドリと話すうちに、そんな風に夢を見てもいいのか・・・と自分が夢を見られていないことを初めて認識した。その違いも個人差の域を越えるものではないかもしれないが、少なくとも私が将来について話した数人のアメドリからは共通して「自分の未来を自分でユニークに作り上げていく意志」を感じ、それは普段私が日本の友達と話す中で感じとったことのない新鮮なものだった。自己の思考にストッパーがかかっていたことに気付けたおかげで、私の視野と選択肢は大きく広がった。その意味で、JASCは私にとってLife Changing Experienceであったと既に確信している。しかし、JASCが本当に人生を変えるかどうかは全てJASC後の行動にかかっていると思う。生かすも殺すも自分次第。そう肝に銘じながら、日常を大切に過ごしていきたい。それぞれアプローチは違えど、72人で少しでも良い世の中を創っていただけると願っている。

ECのみんな、1年間本当にお疲れ様でした。最高の会議を有難う！滑り込みセーフな感じで奇跡的に皆と夏を共にできて、本当に良かったです。本会議開催に御協力下さった全ての方々に感謝致します。どうも有難うございました。

#### 林 藤彦

ソーシャルデザインをする場としてJASCに来た。そんなアツい奴がJASCにはいた。

日本人は議論が嫌いか？

答えは人によって違うと思うが、少なくとも議論をする相手を選ぶと思う。自分の考えや意見をぶつけることで他人との摩擦を極力少なくし、その場を和やかなものに保ちたいからなのかもしれない。自分はこのことをアメリカに留学した時に感じた。

建設的な議論をすることは大事だが、別に学校の

## 第5章 参加者の声

授業ではないし、実際の交渉現場でもないのだから合意が得られる必要はない。何か答えが出る必要もない。思うに、議論をすることで、またひとつ自分の中で新たな多様性が生まれるし、別の折にその問題について考える機会があれば、新たな視点や深みをもってその問題を捉えることが出来る。これが議論のメリットだと感じる。

自分を含めて、日本人にはその感覚がなんとなく薄い気がする。空気を読むことと議論を避けることが混同されているのかもしれない。また、つつい答えを探しがちなかもしれない。答えを知らない問題については議論をしたくないということもある。ただ、基本的にそれはすごくもったいない気がする。時と相手を選ぶ必要もあるが、自分も随分もったいないことをしてきたと思う。

そんな中、JASCに参加をした。そこにはアツい奴がいた。

「どうしてそうなのか？」

「この立場の人から考えるとどうなのか？」

「なにが問題の本質なのか？」

意見をぶつけることは質問を投げることでもある。独りよがり論じるのではなく、相手の意見を求め、それに対して議論を建設的に積み重ねていく。JASCで東京、函館、長野、京都と回る中で、安全保障問題、漁業問題、農業問題、地方分権、核エネルギー問題など、様々な問題について考えさせられる機会があった。その都度、意識の高い日米の学生と議論が出来たことは非常に有意義だったと思う。自分自身は、最後のアメリカ側からの手紙で「あなたは非常に相手の意見を尊重する一方で、基本的に日本の立場で論じることが多いよね。世界全体の最適を一緒に考えていけたら嬉しい。」といったフィードバックをもらった。「日米から地球へ」という今年のJASCのテーマから考えても、一人の世界市民としてもその通りだなと感じた。今後の自分の課題でもある。

会議中、何度も思い出していた言葉がある。直前合宿の時にECの瑛美に言われた言葉だ。

“Time is limited. Space is unlimited.”

時間は1ヵ月というスパンで本当に限られてい

る。だが、JASCという空間の中でどう動きまわって、デリや会議中に出会う人たちとどう絡むかは本当に自分次第。だからとにかく動き回りなさい、意見をぶつけなさいということだった。

楽しく動き回れた素晴らしい1ヵ月だった。

最後に、あのJASCという空間を作るために一年間膨大な時間を費やし、大きな犠牲を払ってくれたECに心から感謝したい。本当に、本当にありがとう。ECの裏方で尋常でない準備がなければこの素晴らしい会議はなかったと思う。自分もこれから何らかの形でJASCに貢献できたらと思う。そして、会議中、時にはストレスや疲労で発狂しそうになることもあったが、その都度無理やり笑わせてくれた分科会のメンバー、MY DB JMD、友理、Alisa、歩美、Emily、聡、Michelle、美由紀、Naoki、全員に本当に感謝したい。

JASCがソーシャルデザインについて論じることも出来る、そんな場であり続けてほしいと思う。

### 誉田有里

第61回実行委員が発足した去年の9月からの一年を振り返り、改めてでてくる思いは感謝の念である。実行委員としての仕事は、今まで私が経験したことないことばかりで毎日が手探りだった。それまで比較的のんびりと学生生活を送っていた私にとって、実行委員としてのこの一年は衝撃的だった、と終わってみて思う。忙しいと思う暇も、不安を抱いて立ち止まる余裕もなかったほど突っ走った。どこで何をしようとも、JASCが頭から離れたことは一日もない。睡眠時間を大幅に削りながら次々と襲ってくるタスクをこなし、決して楽だったとは言えないこの一年であったが、一度たりとも辞めたいと思ったことがなかったのは、純粋にそんな日々も楽しかったからであり、純粋に61回会議が楽しみであったからであり、何より、力を貸し、支えてくれた人々がいたからである。一人では生きていけず、周りの人によって自分が生かされていること、多くの人の汗と涙で社会が成り立っていることを痛感する日々であった。

思い起こせば、去年9月に実行委員になってから

本会議を終えるまで、私が一貫して自分に課していたことは「逃げないこと」であった。不安やプレッシャー、怠惰や悲しみに直面しても、それを理由に逃げるのではなく、受け止め一つ一つ乗り越えようと決め、立ち止りそうになるたびにそう言い聞かせていた。しかし、一貫して「逃げない」でいようにも、自分の限界をつきつけられ、逃げなくとも何も貢献できない自分の無力さに悲しくなることもあった。実行委員としての責任は果たさなくてはならぬも、実行委員であることによって皆から線引きされぬよう、本会議では皆と語り合い、仲良くなろうと意気込んでいた。しかし、実際は本会議が始まるや否や、改めて72名という人数のボリュームを感じ、焦燥感と不安に飲まれ、余裕がないように見せないことだけでエネルギーを消耗してしまい、自分の心のキャパシティのなさに悔しくなることもあった。しかし、ひとりひとりからもらった、温かい言葉や思いやりに、毎日のように励まされ、ひとりひとりの魅力に毎日魅了されていたのも事実である。また、皆が笑っているのを見るのが何よりも嬉しく、相当な活力になっていた。

この1年間、学生である私たちにできることは何か、なぜ今日米なのか等、問うべきことは多く存在した。明確な答えを見出そうとする一方で、企画運営をするにあたり、考えることだけに費やせる時間も限られており、行動に落としていかななくてはならない葛藤もあったように思う。動きながら考えること、それには是非があるだろう。しかし、動きながら見えてくることがあり、動かなくては見えてこないこともある。時としてリスクを伴うこともあるが、行動を起こすことによって開けてくる視野も変わってくるだろうと思う。リスクを取った分だけ、きつと得られるものがあるに違いない。

私が一個人として多くのことを学ばせてもらった日米学生会議は、実に多くの人の支えがあって開催されている。特にこの一年は、一つ一つの企画が遂行されるたびに、ご協力いただいた方々の顔が浮かび、実行委員としての責任を感じながら活動してきた。しかし、実行委員を終えた今、改めて結果として責任を果たせたどうかを問うと、至らなかった点

や未熟だった点も多く浮かんでくる。今回、本会議を通じて見えてきた会議の今後の課題を忘れず、この先も是非続いてほしい。国境を越えた十人十色な仲間と出会い、様々な価値観とぶつかることのできる、かけがえのない貴重な一夏を一人でも多くの人が経験してほしいと強く思う。

#### 松尾恵輔

第61回の会議で常に、私は昨年参加した60回会議の残像にとらわれていた。たとえば、春合宿を終え、JASCに対する思いを強くさせていく参加者。本会議の中で壁にぶつかり、悪戦苦闘する彼らの悩み。そして本会議を通してデリゲート同士が互いに親交を深める様子。それらの光景を魅力的に頼もしく思う反面、既に昨年見た光景をリピートしているようで新鮮味にかけているように感じた。「参加している人は違っても、会議で発生する事態は変わらない。そんな中で自分が学べることは何かあるのか。」と、時には他の参加者との間に意識的に線を引き、考えていたのだ。

残念ながら、会議が終了するまでこのような感覚が消えることはなかった。そこにいた個々の人間や事象に深く注目せず、事態を過度に一般化していた自分の態度は悔やまれる。

そんななか、会議に2年関わったからこそ再認識できた、社会における会議の意義がある。それは参加者たちの「海のむこうの人」に対する想像力の醸成だ。JASCの参加者達は1ヶ月をかけ、真剣に互いと向きあう。その中で、アメリカと日本の意見の習慣の差に愕然とし、お互いの距離を感じてしまうこともある。だが、1ヶ月という時間でさまざまな話をする中で、違いにあるバックグラウンドに目をむけ、相手の言っていることを理解し、納得できるようにしようという姿勢になる。さらに、はじめは価値観の違いにより一瞥して通り過ぎてしまっていた人とも丁寧に向き合い、「友達」になることができる。

この想像力は、これからの社会で一人ひとりの人間が持っているべき資質になるだろう。思うに、格差や差別、環境問題といった現代社会が抱える問題は、それによって苦しむであろう人々の事情への、

## 第5章 参加者の声

理解不足や無関心から起こり、解決が難しくなる。途方もない話ではあるが、我々 JASCer が社会でこの「想像力」をひろめ、さらに自分自身も「想像力」をもって働く中で、この社会を少しでもよいものにしていきたいという使命感をもった。

思い出は美しく、できればこの辺りで筆をおきたいところだが、JASC が大好きであるからこそ恥を承知で、書く。今の JASC には改めなければならないところもある。それが、「学生の質の悪い甘え」だ。学生の立場だから言える意見があり、多くの方々が寛大な心でそれを支援してくれる。しかし、学生であるからといって、一度言い出したことへの責任感のなさや、人の親切や行為に対する敬意のなさは許されない。私も含め、今の JASC にはその意識が足りなかった。JASC という活動を更に多くの方に理解してもらえるよう、発展させられるよう、今後は改善していかなければならないと思う。

最後に、すばらしい思い出を下さったホストファミリーの富岡さん、国際教育振興会の皆様、会議と一緒に作ってきた EC の秀也、おゆり、もっちゃん、えみ、たくま、こうじ、ゆり、活動を見守ってくれた家族に心から御礼申し上げたい。本当に、ありがとうございました。

### 松本秀也

1934年、歴史の教科書でしか見たことのないような数字。日米学生会議が、形を変えながらも続いてきた75年という歳月、築かれてきた歴史。およそ想像もつかない過去の参加者の苦労や想い入れを、会議の準備期間に強く意識し、その結果様々な葛藤が自分の中で起こった。会議をすることにどれだけの意味があるのか、1年間悩み続けた。60回会議終了後に確かに感じ、心に秘めた、この日米学生会議の意義を、新しい61回という会議を通じて参加者の皆に伝えたい。委員長になった当時はその一心だった。

1ヵ月という限られた時間の中で、日米の学生が成せる事。その限界に挑戦しようという想いとは裏腹に、しばし自分を見失い、仲間を見失い、今にも残る後悔は数え切れない。それらを振り返るたび、自分が会議に何を残せたのか、委員長として成せた

ことがあったのかと反芻してみるが、金塊を求めて深い海を彷徨う海人のように、暗闇の中、ひたすら下降し、海水越しにゆらめく上空の陽光を振り返っている。会議が終わり1週間が経った今も、実行委員発足当時に感じていた気持ちを61回の会議で伝えることが出来たのか。未だに答えは出ていない。

参加者として終えた60回の会議では、米国の学生との理解がいとも簡単に出来たと感じていたが、それは大きな誤りであったと今回の会議では気付いた。確かに仲良くなつた。皆を友人と呼べ、親友として一生付き合っていく者も多く在るだろう。しかし、分かり合うということ、お互いに全てを受け止め、いかなる場にあっても相手の気持ちに推測をたてて相互協調していくというレベルでの「理解」には、程遠かった。国際交流の難しさ、異文化理解の最たるものを感じた気がした。

また委員長として、実行委員の皆には多くの場面で支えられてきた事も触れておきたい。京都に1人で居ながら、JASC への熱い想いを胸に、自分とは全く違う思考を持ち、常に自分を「ハッ」とさせてくれたもっちゃんには、人間として、また違った価値観を学ばせてくれたことに感謝したい。有難う。Web を中心にした広報に尽力し、唯一の平成生まれの独自さを持つ KOJI は、同じく東京サイトコーディネーターとして、いつも迷惑をかけてしまったが、いつまでも情熱を絶やさず、実行委員内にいつも新しい風を吹き込んでくれた、有難う。副実行委員長として、大きな期待と重圧で大変だったであろうユリ。サハリン企画の時、マクドナルドで情熱のままに、締め切り日を設定し、実行したことは、一生忘れないよ。色々大変な事もあったけど、いつも元気に仕事をこなしてくれて有難う。たくま、このエリートがまた厄介だった。今年は私立組と国立組の意見の対立が絶えなかった。そしていつもの確で批判的な意見を言うのがたくまだった。本当に今まで会ったことのない人種で、なんとか論破しようと試みたこともあったけど、無理だったね。分科会リーダーとしてのたくまは、俺には到底出来ない立派さであったと、本当に感心しています、有難う。今度数学教えて。おゆり、経理としてミスの許され

ない仕事は、実は一番大変で時間もかかったと思ってる。いつも俺の文句や中傷にめげず、ひたむきに実行委員の活動をやってくれて、本当に助かりました。おゆりが居てよかったです、有難う。けいすけ、60回の時から同じ分科会メンバーとして、色々な話をしたね。俺の奔放さにいつも笑顔で対応しながら、しっかり自分の意見も持って、皆に愛される存在でした。俺が吹聴するまでは……。独特の雰囲気、実行委員内に束の間の休息をもたらしてくれて有難う。就職活動の時期は励ましてくれて有難う。そして、60回の選挙でチェアに立候補するときに声をかけてくれたエミ。いつも冷静に、かつ感情的に会議の事を思い、献身的に仕事をこなしてくれて有難う。エミの仕事にミスはなく、いつも助けられてました。そして様々な場面での相談役としてのエミは、一番頼れる存在だったよ、有難う。

会議終盤、ふと「この瞬間は、もう二度とこないんだね。」という言葉が発した。ありきたりな言葉であり、かついつも意識すべきことなのかもしれないが、京都でこう感じた事は、とても印象に残っている。第61回日米学生会議で起きた全ての瞬間は、今後の私の人生の中で、これほど幅広く経験し、出会いを果たしたという意味で、最も大きな教訓になったことは間違いない。そして、二度とは戻らない瞬間であっても、それを限りなく再現可能にする仲間が出来たことは、一生の財産であり、いつまでも自分の中で見失うことの無い、深い海の底の宝物であることは間違いないと断言できる。心から、61回会議に参加し会議を創ってくれた72人に有難うと言いたい。

最後に、このような素晴らしい経験、出会いを可能にくださった、主催団体の国際教育振興会、その他第61回日米学生会議に携り、並々ならぬご支援ご指導を賜った全ての皆様へ感謝申し上げ、委員長として、会議終了の報告をさせていただきます。

#### 安川瑛美

JASCは箱だ。私たちは真新しいJASCピンをつけ、その箱の中に入る。この箱を宝箱にするか、ガラクタの詰まった段ボールにするかは個人次第であ

ることは間違いない。箱の中で色々な出会いや気づきを経験し、その結果箱の価値が決まってくる。ぶつかり合いをすればするほど、もがけばもがくほど箱の価値は高まるのではないかと思う。実行委員同士、分科会メンバーとの議論、OB/OGの方々、サイトでお世話になった方々とのコミュニケーション、これらの対話は衝突でもあり理解しあうことでもあり、つまり61回会議の創作過程である。私はとにかくこの創作過程の一瞬一瞬から学びぬき、楽しむうと決めていた。この過程が終了して何が残るのか、会議の存在意義への疑問の問いが見つかるかどうかは、最後にならないとわからないだろうと思っていたからである。

会議中いくつかの発見があった。

あるアメリカ側の参加者は、東京一長野間の移動中に車窓から見える雄大な日本の自然に、「まさか日本にこんなに神秘的な自然があるとは思わなかった」とパシャパシャシャッターを切りながら、寝ているみんなが見逃した日本の美をひそかに堪能していた。同参加者は、小布施町がどこにあんなにも美しく町を保つことができるのに十分な財政があるのかと悩んだ末、この町は実はケシを栽培しているのではないかとユニークな論を展開していた。発見の場を提供した上で、企画側の醍醐味は“予測していない反応”が生まれた際の驚きなのではないかと思う。

コミュニケーションの難しさも日々痛感した。一年ぶりに実行委員全員がそろった東京では日米間に不穏な空気が漂っていた。それは、JASCへの熱き思いの空回りと会議が始まっているという焦りや戸惑いに、不安・期待・葛藤が混ざり合い生まれた齟齬であった。ミーティングでは涙も流れた。しかし、こういう青臭い経験もJASCに必要であるとも再確認した。アカデミックさを追求したいなら、学会にできればいい。真理の探究なら1人でだって可能だ。結果や解決策だけに軸を起きたいならビジネスコンテストやコンペに出ればいい。英語で交流をしたいなら駅前留学とHUBで事足りる。ビジネスコンテストでも学会でもない。JASCの意義は、個人個人の価値観という変数に影響されながらこれらの要素

## 第5章 参加者の声

の中間点を取るべく、模索されてきたのではないだろうか。

分科会の議論からも発見があった。日米の女子トップであるひろかとAmieは議論の質に多大に貢献してくれ、冷静派かつ草食系のゆーきとDylanの発言は議論に深みを与えてくれた。しゅーたとYudaiのコンビは持ち前の地頭の良さをもちながら皆の弟分であり、キュートななおとMadisonはマイペースながらも場を盛り上げてくれた。実は二人とも泣き上戸(私も否めないが)だった。いつだったか、「良い議論がしたい。解決策は二の次」と言っていた。なんとという名言だろう。過程(=対話)の質を上げる、過程に価値を置く。問題解決能力とはよく言ったものだが、問題把握・分析といった泥沼にとっぷりはまる覚悟がなければ、産み出てる解決策の質自体さえ限定的なのだ。

思えば、去年60回会議が終わり61回の実行委員に日本側8名が出揃ったときには知るすべも無かった一人ひとりの個性がぶつかり合った。ポーカーフフェイスだが情に弱い実行委員長秀也、常に明るく責任感の強いゆり、緻密な論点と反論を可能にする思考回路を持つたくま、Interactive empowermentを「対話と発信」と和訳し皆をうならせたもっちゃん、既存のものの踏襲をよしとしない改革派のこうじ、頑張り屋さんかつ安定しているおゆり、そして世渡りが上手いけど繊細なけいすけ。共通項を見つけるのに苦勞をするようなメンバーで、案の定、衝突を多々重ねながらも作り上げた61回は、私の一生の宝物の箱になるであろうと会議後には素直に思うのである。

2009年の夏をJASCで過ごせてよかった！みんなありがとう。

### 安川皓一郎

JASCは学生としての最後の場だったはずだった。

しかし、それは始まりの場になってしまった。

私は春合宿で「日々学び、日々変わり、日々を変える」人間でありたい、そして周囲の人間がそうであって欲しいと言った。

一人で本を読むのではない。

一人一人の人間という、一つの人生の本棚と向き合う面白さ。

その本棚が71もあった1ヵ月間。

それは、大きなChangeを私にもたらしてくれた。Life Changing experience

JASCの謳い文句はいつもそうだ。

1ヵ月で人生が変わるのか？そう思った気持ちは嘘ではない。

しかし、私の人生は変わってしまった。

JASCとの出会い、JASCで出会った人たちとの交流・・・

それらは私の中で次第に大きな物となり、私の次の「選択」を左右するほどのものになった。

社会人か、学生か。

まだまだ若い、学生同士が持てる最大限の知識・意見をもって語り合う。

そんな魅力に改めて気付かされてしまった。

私は幸いなことに、第62回日米学生会議を創る事ができる。

新たな71人との出会いは、いかにして私を変えるのだろうか？

そして、いかにして私は彼らを変えることができるだろうか？

1年間で賭けた挑戦を、私は今始めている。

Yes, We canではなく Yes, We did itと言えるように。

それぞれがそれぞれの担う世界を変え、そんな言葉をみんなで語り合える日がいつしか来るのだろうか？

### 山本佳世

社会人学生としてJASCに出会った。

「日米学生会議」の存在を知ったのはもう10年以上前であったが、そこに何か大きなエネルギーを感じたことを覚えている。その後、約10年間の社会人生活を経て、思いがけないタイミングで再び学生となり、しばらくしてJASCを思い出した。今の自分が学部生の皆に交じって共同生活を送ることに全く抵抗がなかったと言えばウソになるが、それ以上に、

気になっているチャンスにチャレンジしないで終る後悔の方が怖かった。そして、運よくJASCerに選ばれた時は嬉しかった。異色の私を選んでくれた実行委員の器の大きさに本当に感謝している。

参加が決まり、何かJASCに貢献できることはないかと考え始めた。今振り返ると少々肩に力が入っていたようにも思うが、その時にまず浮かんだのが広報だった。広報を専攻する学生として、地元北海道での認知、理解の向上を図れないものかと考えた。お役に立てたかどうかはわからないが、新聞取材の実現などを通じて、北大をはじめ、道内での認知度は幾分上がったと感じている。また、今回の活動から広報の実践やメディアとの関わりについて、自身も学ぶことが多かった。

JASCで得たものは大きい。だが、それは何かと聞かれると上手く言葉にまとまらない。社会人として心身ともに無理をした時期もあったが、思っていた以上に健康だと自信が持てたことも収穫だし、JASCに参加しなければ訪れることもなかったかも知れない場所での発見も収穫であった。しかし、何よりも嬉しかったのは、学部生を中心とするJASCerのみんなが気軽にファーストネームで呼んでくれる、敬語なしで話をしてくれる、ということ

だった。JASCに参加しなければなかなか得ることのできない関係だと、このことにも感謝している。

JASC期間中で特に印象的だったのは、長野県の小布施町で過ごした時間だ。町を挙げて歓迎して下さり、町長の市村さんから直接まちづくりについてお話を伺うこともできた。ホームステイも体験でき、ホストファミリーになって下さったご両親とは短い時間ながらも色々な話をした。また、この町では何度も美味しい食事に舌鼓を打った。ホストマザーにごちそうになった栗ソフトも美味しかった(笑)。

JASCerのみんなからも多くのことを学んだ。行動力と積極性を兼ね備えていたり、他人を思いやれり、学部の三、四年目にして既にかんりの専門知識を持っている人がいたり、個性溢れる多様な顔ぶれだった。そして私は、そんな彼ら彼女らを羨望と応援の眼差しで見ていた。

全体を通じて、春合宿から数ヵ月間一緒に活動してきた分科会のメンバーと、実行委員の皆には特に感謝している。様々な場面で支えになってもらい、勉強もさせてもらった。現役学生の仲間たちは今後、社会に出てそれぞれの道で活躍していくのだろう。私もそれを励みに、明るく前進していきたい。